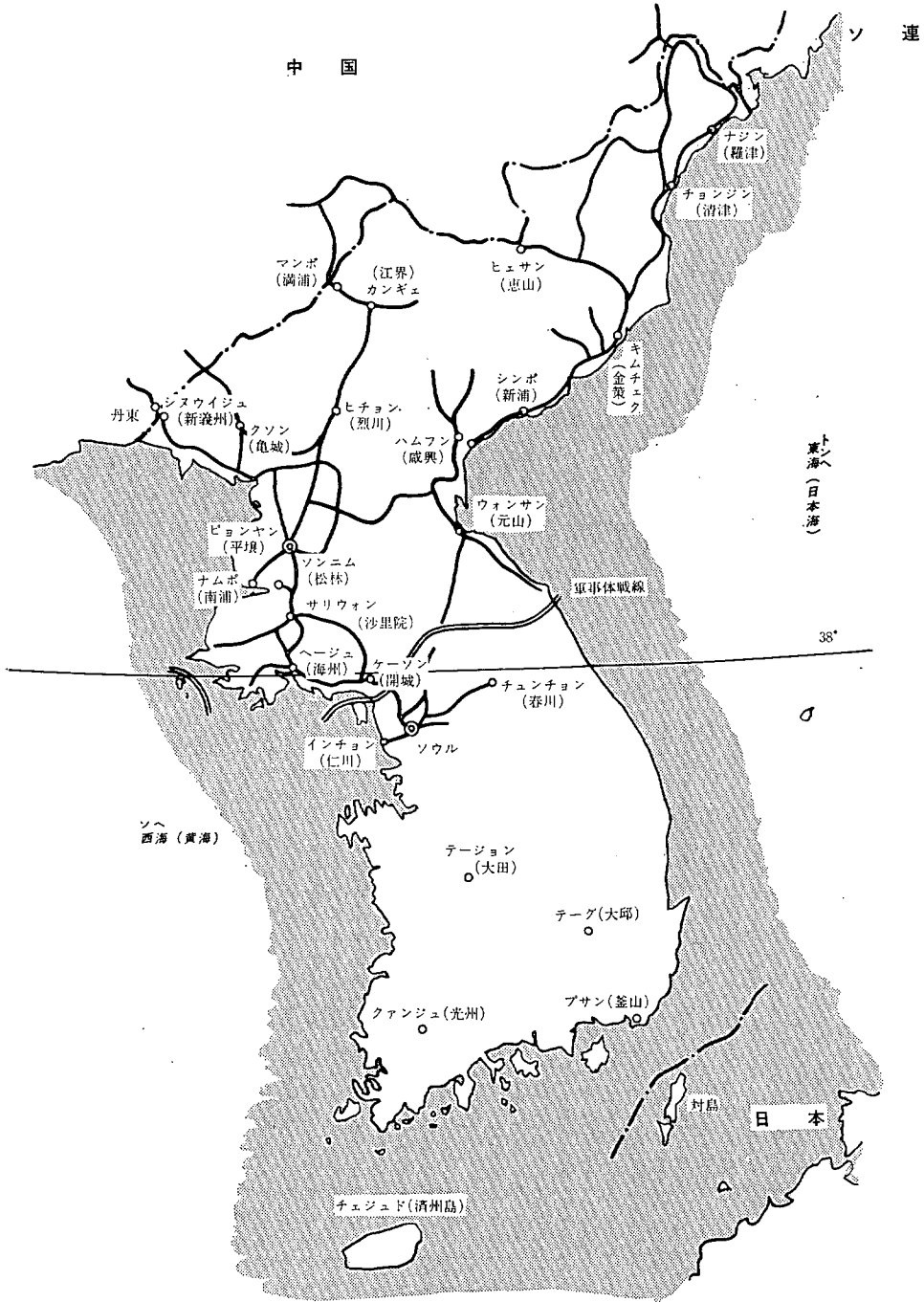


北朝鮮



朝鮮民主主義人民共和国

面積	12万0538km ²
人口	約1400万人
首都	ピョンヤン (ただし憲法ではソウル)
言語	朝鮮語
政体	人民民主主義共和国
元首	崔庸健最高人民会議常任委員会委員長
通貨	ウォン (1米ドル=2.36ウォン)
会計年度	1月～12月
度量衡	メートル法

1971年の北朝鮮

対外関係

1971年の北朝鮮の動向をふりかえってみると、なによりもまず外交・国際活動の比重が、従来にもまして、大きなものとなってきたという印象を与えられる。

北朝鮮はこの年新6カ年計画の第1年度を迎え、野心的な建設の第一歩を踏み出したのであるが、その具体的な実情（進捗状況）については、ほとんど明らかにされていない。それに代わって、外交・国際活動の活発な動きは、一だんと強まり、ほとんど年間の全日誌を埋めつくすほどである。むしろ、この傾向は今にはじまったことではなく、7カ年計画の挫折とその3年間延長が決定された1966年ころからの特徴である。けれども、1971年にいたって、その傾向は、まさにひとつの頂点にきたかのようにみうけられる。その原因としては、次の2つが考えられよう。

第1は、71年には、朝鮮情勢に深い関係をもつような国際的激動が、次々に起ったことである。そのもっとも集中的なあらわれが、7月のニクソン訪中発表であり、10月の中国の国連復帰であったことはいままでもない。これをもう少し立ち入っていえば、中国外交政策の“転換”ともいべき大変化と、その世界外交舞台への登場という新事態は、アジアとりわけ中国周辺諸国の位相にいちじるしい変化をよびおこしつつある。それがもっとも悲劇的な形をとったものが、11月のインド・パキスタン戦争であった。この激動する国際情勢の中で、70年の朝中共同声明以後、急速に中国と接近しつつ、なお自主独立路線を保持しようとする北朝鮮にとって、多角的な外交・国際活動を展開することこそ、ひとつの活路につながるものであった。

第2に、昨年の年報でふれた通り、多難であっ



板門店における南北朝鮮赤十字社予備会談

た7カ年計画をかりうじて乗り切った時点でさらに野心的な6カ年計画を遂行するためには、もはや単純な一国的規模の自力更生方式のみによっては、解決しえぬ条件が山積している。石油、ゴム、繊維などの資源の面でも、自動化、能率化の技術の面でも、諸外国の産物や成果を導入しないかぎり、6カ年計画は重大な困難にみまわれるであろう。このような経済建設上の必要からいっても、外交・国際関係の拡大と改善は、焦眉の急となっているといえよう。

このような2つの原因から今までになく活発化した外交・国際活動の面を、この報告でもまず冒頭にとりあげて分析してみることとしよう。

1. 対ソ・対中関係

北朝鮮の“自主独立路線”といわれるものの対外的表現としてもっとも特徴的なことは、鋭く対立し緊張する中ソ関係のあいだに立って、そのどちらとも友好関係を維持していることであろう。1971年においては、その姿勢はやや中国寄りに傾いているとはいえ、依然として、対ソ友好の姿勢

も崩していない。学術、技術、文化、労組、農業、銀行などの代表団が年間を通じて絶えず朝ソ間で交換されている。3月30日から4月9日までひらかれたソ連共産党第24回大会には、金一第1副首相を団長とする朝鮮労働党の代表団が参加している。

とくに注目されるのは、ソ連側が北朝鮮の離反を恐れて、積極的な働きかけを行ないつつあると思われることである。たとえば1月30日には朝ソ経済・科学・技術協議会第6回会議のために、ノビコフ副首相を団長とする代表団が訪朝し、7月5日に、ソ連はマズロフ党中央政治局員兼第1副首相を団長とし、レオーノフ党中央委員兼サハリン州党第1書記、ロジオノフ党中央委員兼副外相らを団員とする大型代表団を朝鮮に送った。これは、朝ソ友好・協力・相互援助条約10周年記念行事に参加するためのものであるが、同条約の期限が10年で一応満了したのち、さらに「一方が期限満了の1年以前に、条約廃棄の希望を表明しない場合」(第6条)という事実をふまえて、さらに5年間有効期間を延長することを確認する意味をもったものであった。

これは、同じく7月10日に10周年を迎えた朝・中友好・協力・相互援助条約の記念行事にさいして、中国もまた李先念党中央委政治局員兼副首相(事実上の外相・団長)、李德生党中央政治局員候補兼人民解放軍総政治部主任、耿飈党中央委員兼対外連絡部長、白相国対外貿易部長らの大型代表団を送り、同じく期限満了になった同条約の延長を確認(ただしこの場合は無期限)したのと、好一對をなすものである。ただし、ここで注意しておかねばならないのは、ソ連の場合には一方的に代表団を送っているのに対し、中国の場合には、朝鮮側も同時に、金仲麟党政治委員兼中央委秘書を団長とし、金万金党政治委員兼副首相、金鉄万党中央委員兼人民軍第1副参謀長、李鳳吉党中央委員兼慈江道党委責任秘書、韓榮学党中央委員兼人民軍中將、金吉賢党中央委副部長、金在奉副外相らを団員とする代表団を中国に送って、代表団の交換という形をとっていることである。このことは、北朝鮮が対ソ・対中関係に異なるウエイトを付していることを公然と表明したものであるとともに、ソ連側が対朝鮮という点では、一方的な

立場に立たされていることを意味する。

ソ連との関係ではかなり微妙な個所もあらわれている。ソ連は、年来主張しているアジア集団安全保障体制を推進するためにアジア諸国にさかんに働きかけを行なっている。9月8日に韓国に対してサッカーチームを送りこんだのもそのあらわれであろう。これに対して、朝鮮中央通信は、9月11日にすぐ論評を加え「理解しがたいことである」と反発した。ところで、そのすぐあとの9月27日にはナホトカでソ連と北朝鮮間の国境貿易協定が結ばれている。従来も、国境貿易はその都度行なわれていたのであるが、正式の長期協定が結ばれたのは、これが始めてである。これはややうがって考えれば、サッカーチーム問題で反発した朝鮮側をなだめるために、ソ連がただちに手を打ったものとも考えられる。

同時に、朝中関係も、やや微妙な段階にさしかかった。

4月7日に名古屋の世界卓球選手権大会に出場していた中国卓球代表団が、アメリカチームの中国招待を発表し、いわゆるピンポン外交を開始したところからそのきざしはあらわれはじめた。すでに同大会会期中から、同時に出場していた北朝鮮代表団と中国代表団とのあいだに、微妙な異和感が流れていたという印象もたれている。同大会で中国チームがかいらい政権であるとの理由で対戦を拒否した南ベトナムおよびカンボジアのチームとも、朝鮮チームは淡々と対戦した。

また6月12日に板門店でひらかれた第317回軍事休戦委員会で、国連軍代表のロジャーズ米少将が、休戦ライン非武装地帯の平和利用を内容とする新提案を行なった。これに対し北朝鮮の韓榮玉代表は、ただちに「断固拒否する」と言明し、つづいて17日人民共和国外務省スポークスマンは、この提案を「恥知らずなぎまん策動」であり、「朝鮮での新戦争挑発策動をいっそうながすための陰險な目的から出たものである」とはげしく非難した。ところがこの裏にもうひとつの動きがあった。北朝鮮代表は12日の会議終了の約2時間後に、提案のくわしい説明が予定されている軍事休戦委秘書長会議を6月15日にひらきたいと申し入れ、さらに14日になると、追っかけて軍事休戦委中国代表丁甘汝は12日付で何渠若と交替し

たと通告した。丁甘汝は1966年8月5日の第228回本会議以降欠席中だったのであるから、これは交替というより、中国代表の5年ぶりの新参加といった方があたっている。新代表何渠若は、外務省次官クラスの文官である。何代表が実際に顔を見せたのは、7月9日に開催された第318回本会議からである。ロジャーズ代表はこの席上で、前回の非武装地帯平和利用提案を、ふたたび強くくりかえした。そして北朝鮮側もこれに応酬するかのようになり、7月29日に第319回本会議の開催を要求し、この席上で、平和確立のための7項目の反対提案をした（米軍の南朝鮮からの即時撤退など）。これによって、これまで単なる非難と悪罵のやりとりで終っていた軍事休戦委員会の基調は一変して、外交交渉の場ともなり得る可能性が示された。ある意味ではこの一連の動きによって、のちの南北赤十字会談のベースが作り上げられたといってもよい。その裏には、中国の何らかの意味での介入ないし示唆があったらしいことが、推察される。

7月16日にニクソン訪中が、米中双方で発表されるや、北ベトナムは18日からただちに活発な批判的言論を展開しはじめた。“ニクソン・ドクトリンは、社会主義諸国の一部をまで味方にひき入れ、大国間の妥協を達成し、小国をそれに従属させようとするものだ”というのがその趣旨である。ところが北朝鮮は、約20日間にわたって態度を鮮明にしなかった。そして7月22日から8月11日まで長期の訪朝を行なったカンボジア国家元首兼カンボプチア民族統一戦線議長ノロドム・シアヌーク親王を歓迎する平壤市民大会が8月6日にひらかれた席上で、金日成首相ははじめてこの問題に直接ふれる演説を行なったのである。そのもっとも重要な箇所は次のとおりである。

「アメリカ帝国主義が内外で袋小路に追いつめられた歴史的な環境のもとで、先頃ニクソンは、中国訪問計画を発表しました。

これは、世界人口のほとんど4分の1を占める中国における偉大な革命的変革過程を力で阻止しようと20年以上も無謀に追求してきたアメリカ帝国主義の中国敵視政策がついに完全に破産したことを意味し、アメリカ帝国主義が世界の強大な反帝革命勢力の圧力の前に屈服

したことをものがたっています。

けっきょくニクソンは、かつて朝鮮戦争で敗北したアメリカ帝国主義侵略者が板門店に白旗をかかげてあらわれたように、北京に白旗をかかげたはずねてくることになったのです（中略）。

ニクソンの中国訪問は、勝利者の行進ではなく、敗北者の行脚であり、アメリカ帝国主義の西山落日の運命をそのまま反映したものであります。これは、中国人民の大きな勝利であり、世界の革命的人民の勝利であります」

この言明は、いわば米中接近を全面的に肯定し、中国側の勝利として評価したものである。シアヌークが、ちょうどキッシンジャー米大統領補佐官の訪中（7月9～11日）の終わった翌7月12日に、当時訪中していた北朝鮮の党・政府代表団（前記金仲麟団長の朝中条約10周年記念行事代表団）と会見しており、その10日後に北朝鮮を訪問してから、この金日成演説まで16日間を経過しているところからみると、金日成、シアヌーク間で、相当慎重な突っこんだ意見交換がなされたものであろう。

この演説がおこなわれた直後の8月8日に、北朝鮮政府経済代表団が中国に向かい、15日に中国政府と経済協力協定を締結した。つづいて8月18日、呉振宇党中央委政治委員兼書記・人民軍総参謀長を団長とし、呉極烈人民軍空軍司令官（中将）、金光鎮砲兵司令官（中将）、崔昌煥海軍司令（少将）らを団員とする大型軍事代表団が中国に向かい、黄永勝、呉法憲ら中国人民解放軍首脳と8月19日に、周恩来首相と25日に会見し、なお長沙、韶山、武漢など中国各地を視察したのち、9月6日に軍事援助協定を締結した。この内容は不明であるが、同日夜、玄峻極中国駐在朝鮮大使が主催した宴会の席上、黄永勝中国人民解放軍総参謀長が「双方は会談し、両国の人民と軍が団結を強め、支持しあい、緊密に呼応し、共同の敵米帝国主義と日本軍国主義に反対する闘争を最後までやりぬく決意を示した」とのべたところからみると、ニクソン訪中問題について北朝鮮が積極的な評価を表明したことに対する代償として、中国側から何らかの具体的な軍事的保証を与えたのであろう。

11月18日に中国の核実験が成功したことを祝って、20日に金日成首相みずから毛主席、周首相あての祝電を送った。これは12月2日にソ連の自動惑星間ステーションが初めて火星軟着陸に成功したのに対して、金応三工業科学院長がソ連科学院院長に祝電を送っただけであるのに対して対照的である。

また中ソ間の対立を国際的な規模でしめした12月4日のインド・パキスタン戦争にさいしては、北朝鮮は、中央通信を通じ、まったく客観的な戦局報道を行なったのみ（12月7日、17日）で、積極的な論評を行なわなかった。ただし、12月22日にパキスタンのブット新大統領に対して、金日成首相名で祝電が送られた。「わたしは、閣下がパキスタン回教共和国大統領に就任したことについて熱烈な祝賀を送ります。わたしは、わが両国間に結ばれた友好関係がこんごいっそう強化発展するものと信じつつ、帝国主義と植民地主義に反対し、国の繁栄発展をなしとげ、自主権をしっかりと守るための閣下の気高い活動に大きな成果があるよう心から希望します」というのが、その電文であった。

以上のような経過からみて、1971年を通じ、北朝鮮はソ連と中国の双方に対して微妙な立場に立たされたのであるが、結果としては、さらに一步中国側に接近したものとみてよからう。

2. 対社会主義諸国関係

対ソ連・中国関係とからんで、東ヨーロッパ、アジア、中南米の社会主義諸国との交流も活発化した。ポーランド、ハンガリー、チェコスロバキア、ブルガリア、ルーマニア、アルバニア、東ドイツ、北ベトナム、モンゴル、キューバなどとのあいだに、多くの代表団の交換が行なわれ、文化、経済、技術、法律、情報などの協定が結ばれた。これらの中で注意を要するのは、軍事代表団が3月にモンゴルへ（団長・池炳学副民族保衛相）、4月にルーマニアへ（団長・呉振宇人民軍総参謀長）送られていることであろう。この両国はいずれも中国とソ連の中間に立ち、軍事的力関係をもっとも鋭敏に反映する国である。

中でもルーマニアとの関係は重要である。ルーマニアは、中ソ対決が深刻化したときにも中国と

大使を交換しつづけていた唯一の東欧国家であったが、70年10月にチャウシェスク党書記長兼国家評議会議長がアメリカを訪問し、ニクソンと会談している。このチャウシェスクを団長とする党・政府代表団が71年6月1日から9日まで中国を訪問したその足で6月9日に北朝鮮を訪問し、15日に共同コミュニケを発表している。このコミュニケの中では「双方は、現下の社会主義諸国と共産党および労働者党がマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の完全な平等と自主性、相互尊重と内政不干渉および同志的協力の原則にもとづいて友好協力関係を強め、帝国主義者の侵略政策と植民地略奪政策に反対して決然とたたかい、自由と民族的独立の強化、社会的進歩をめざすすべての国の人民の反帝闘争を積極的に支援する必要があると認める」とのべられている。またこのコミュニケでルーマニア側が金日成夫妻のルーマニア訪問を招請し、朝鮮側もこの招請をこころよく受諾し、訪問期日はのちほど決定するとされたことが明らかにされた。これは両国が他に例をみない親密な接触をとげたことをものごとたっており、米中接近の情勢についても十分な協議をとげたことを意味している。

さらに対東ヨーロッパ社会主義諸国関係で重大な指標をなすものは、対ユーゴスラビア関係の変化である。朝鮮民主主義人民共和国が成立した1948年9月には、すでにユーゴスラビアはコミンフォルム批判の対象とされていたため（ユーゴスラビア非難決議を採択したコミンフォルム第2回会議は48年6月）、これまで朝鮮・ユーゴスラビア関係は完全にとざされていた。そればかりか、1968年8月に起こったワルシャワ同盟軍のチェコスロバキヤ進駐事件にさいし、朝鮮労働党機関紙『労働新聞』は、ユーゴスラビアの態度にふれて「革命の汚らわしい背信者チトー」「チトーは社会主義陣営と世界革命勢力を内部から切り崩すためのアメリカ帝国主義の策動で、かれが別働隊の役割を果たしていることをいま一度はっきりとさらけだした」等と最大級の表現による非難を行っていた。これはコミュニスト用語法からいえば、まさに“不倶戴天”の敵としての扱ひである。ところが71年9月3日に突如、「朝鮮民主主義人民共和国政府とユーゴスラビア社会主義連邦共和国

政府は相互に承認し、外交関係を樹立することについての以前の合意に基づき、両国間の友好関係をさらに発展させることを念願しながら、互いに大使級外交代表を派遣することに合意した」という共同声明が発表された。これと並行して、8月28日からユーゴスラビアの「ビエスニク」紙記者が訪朝し、9月8日に鄭準沢副首相と会見している。これはユーゴスラビアが、ソ連・東欧諸国に対してはもとより、イギリス、アメリカなど西欧諸国に対しても、韓国に対しても、積極的な外交工作を展開しつつある点からみて重要である。また、文化大革命の時期に冷却していたユーゴスラビア・中国関係も、急速に改善に向かっており、6月8日から15日にかけてテパパッチ外相を団長とするユーゴスラビア政府代表団が中国を訪問して周恩来首相と会見、両国の友誼関係をうたった共同コミュニケを発表している。

これらの点からみて、北朝鮮は中国と歩調をそろえて、表面は強硬な戦闘的姿勢を維持しながらも、実質的にはしだいに、ルーマニア、ユーゴスラビアなどを仲介とする緊張緩和政策に転換していったものとみられる。

3. 対西欧・資本主義諸国関係（日本をふくむ）

このような北朝鮮の緊張緩和政策の動向がはっきり見てとられるのは、いわゆる西欧側の対資本主義諸国に対するキメのこまかい動きである。2月にニューヨークに朝鮮・アメリカ友好公報センターが開設され、同公報センター代表が8月に訪朝し、鄭準沢副首相と会見していること、オーストラリア記者ウィルフレッド・バーチェット（4月）、フランス記者ジャン・ラクチュール（8月）、日本記者後藤基夫（朝日新聞社編集局長、9月）などを積極的に受け入れて北朝鮮の実情や考え方をひろく世界の報道にのせる態度にでたことも特徴的であった。

ヨーロッパ諸国の中では、とくに北歐系の諸国に対する働きかけに熱心である。11月25日から12月14日にかけて、金東奎労働党中央委政治委員、中央委秘書を団長とする代表団が、デンマーク、オランダ、ルクセンブルク3国を訪問している（3国の共産党の招待による）。スエーデン、フィンランドなどからも、しきりに記者や左翼政党

の代表団を受け入れている。

なかでも、もっともめざましい変化を見せたのは、対日関係であろう。日本軍国主義に対する激しい非難と攻撃は、あいかわらず一貫してつづけられているが、70年8月の朝鮮赤十字会の帰国問題交渉再開申入れ、71年5月の帰国再開の動向などを軸にして、対日接触はひんぱん化し、その接触態度もソフトに変わりつつあった。71年における大きな転機となったのは、前記したとおり、訪朝した朝日新聞後藤編集局長をむかえて9月25日に金日成首相がじきじき面会し、5時間半にわたる長時間の会談を行なって、北朝鮮政府の意向を詳細に報道させたことであった。この中でも、とくに注目されたのは次の一節である。

「日本が、わが国に対する敵視政策をかえれば、平等と内政不干涉、相互主義（ギブ・アンド・テイク）の原則で、友好関係を結ぶことはできるし、われわれは前からその方針でいる。経済関係をみても、友好関係が結ばれば、日本にも有利だし、われわれにも有利だ。日本が封鎖政策をとっているので仕方なくフランス、イギリス、オランダなどへ行って取引しなければならぬ。国交関係はなくても貿易を発展させていく方針で、国連軍に参加して戦争の敵となったフランスやオランダとも貿易関係をもっている。しかし日本との関係は現在一方的で、日本の技術者はわが国にこられるけれども、わが国の技術者は日本に行くことができない。直接、工場や機械を見なくては注文もできない。

日本との国交はもちろんだが、その前段としてできることがたくさんある。貿易、自由往来、文化交流、記者交換など、われわれは実現を望んでいる。その具体的方法はともかくとして、要は日本政府の態度にかかっている。たとえ与党（自民党）の代議士だろうと、友好促進のためにわが国を訪問されるなら、政党のいかに問わず歓迎する」（「朝日新聞」1971年9月27日）

なお後藤編集局長らの朝鮮滞在期間は9月17日から9月30日までであったが、これとあい前後して、日本から、日朝人民親善代表団（赤松勇ら、9月7日～9月22日）、労働組合総評議会代表団（三原大乗ら、9月11日～29日）、体育協会代表

団（山口久太ら，9月21日～10月13日），学者代表团（鈴木安蔵ら，9月28日～10月19日），日朝科学技術協力委員会代表（井本稔ら，9月28日～10月13日），共同通信記者三上胆（9月17日～11月5日），ジャパン・プレス社山田昭編集局長ら（10月7日～10月20日）が，続々と北朝鮮を訪問して歓迎をうけ，金日成首相，金一副首相，朴成哲副首相，鄭準沢副首相，楊亨燮高等教育相ら要人と会見し，朝鮮各地を見学している。そして，こうした活発な，日本代表受け入れ活動の大詰めとして，10月27日に，美濃部亮吉東京都知事一行が迎えられたのである。この美濃部代表团には，日本の代表的新聞すべての記者の大量随行がゆるされ，代表团に対する異常なほどの歓迎ぶり，視察をゆるされた国内の実情とをつぶさに日本に報道した。金日成・美濃部会談は10月30日に行なわれたが，この席上でも，金日成首相は日本国民との友好交流を力説し，とくに貿易拡大問題については非常に熱意をしめした。さらに，11月18日付「労働新聞」は「朝日両国人民間の友好関係はなにをもってしてもはばむことはできない」という編集局論説をかかげ，朝鮮人民は，日本における「日朝友好促進議員連盟」の結成を積極的に支持歓迎し，日本の進歩的人士と広はんな人民に熱烈な祝賀とあいさつを送っていると表明した。

これらの一連の動きは，10月25日に中華人民共和国の国連復帰が決定したというような状況をふまえて，北朝鮮も国際舞台において公認されることをめざすものであるとともに，経済建設上のあい路を克服するための経済外交の展開を表面化しはじめたものといえよう。

4. 対アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国関係

以上のような対資本主義諸国に対する緊張緩和路線の展開と平行して，アジア，アフリカ，ラテンアメリカ諸国に対する積極的な接近工作も依然として活発に展開された。

とくに71年を通じて特徴的なことは，金日成首相の著作および闘争史（伝記）の国際的な普及活動が精力的に行なわれ，各国，各民族内部における「金日成同志革命活動研究グループ」「金日成同志労作研究グループ」などの組織化，およびそ



美濃部東京都知事金日成首相と会見

れらと北朝鮮国家との交流関係が大々的に宣伝されたことである。こういう動向の頂点をなしたのが，6月21日から28日にわたってピョンヤンで開催された朝鮮社会主義労働青年同盟（略称・社労青）第6回大会であった。この大会には世界各国の共産主義的・社会主義的青年組織がほとんどもれなく招待されるとともに，各国に組織された「金日成研究グループ」が大々的に結集された。これらの代表の到着は6月5日ころから始まり，以後6月30日にいたるまで，連日これら国際青年代表の到着，歓迎集会，レセプション，パレード，金日成首相はじめ政府・党要人の会見などの記事が，北朝鮮政府・党の公式報道を埋めつくすいきおいであった。各国の青年代表の範囲は，あまりにひろいのでここでは省略するが，「金日成研究グループ」の組織範囲は，次の各国にわたっている。

〈ヨーロッパ〉 フランス，西ドイツ，オーストリア，フィンランド，スエーデン，デンマーク
 〈アジア〉 インド，ビルマ，ネパール，パキスタン

〈中近東〉 アラブ連合，シリア，イラク，レバノン，イエメン

〈アフリカ〉 コンゴ，スーダン，ブルンジ，モーリタニア，シエラレオネ，モーリシャス，ザンビア，アルジェリア，マリ，サントメ島

〈アメリカ〉 エクアドル

これ以外にも，「オーストリアで学ぶアラブ・パレスチナ留学生」「ブルンジにあるルワンダ人」

「スーダンにあるエリトリア人」「カイロにある占領下アラブ湾解放人民戦線」「カイロにあるアフリカ民族解放運動団体」「アラブ連合にいるパレスチナ婦人たち」「中近東にあるパレスチナ人民」「イラクにあるパレスチナ人民解放戦線」「ベルギーに学ぶ AALA 留学生」「ヨーロッパのアフリカ大学生」「ザンビアにあるアンゴラ人民解放運動」「ザンビアにおける南アフリカ人民」「ヨーロッパで勉強しているラテンアメリカ学生」「中近東で勉強しているモーリタニア学生」等々個別的な民族グループ、留学生グループの中に、「金日成同志著作選集研究グループ」「金日成同志の偉大な主体思想研究グループ」「金日成首相労作研究委員会」等々さまざまな名称の研究グループがつくられていることが、誇示された。

このような動向は、「金日成革命思想の輸出」として、一時各国政府の警戒をよびおこした。3月にはメキシコで、北朝鮮で訓練されたというゲリラ集団19名の検挙事件が起り、4月には、セイロンで起った武装蜂起に関係があるとして朝鮮大使館員全員が退去させられ、インドでもデリーの朝鮮文化館の活動に対し政府が抗議を行ない、中央アフリカ共和国も朝鮮大使を追放した。この一連の動きは、北朝鮮が1966年以降うち出し始め、1968年の金日成論文「アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国人民の偉大な反帝革命偉業は必勝不敗である」で明確にした反米武装闘争の鼓吹および援助の路線に対する警戒を意味するものであり、とくに各国内部で活発化した「金日成研究グループ」や「友好協会」などの団体が、その革命輸出パイプとして組織化されつつあるものとみての反発的な反応であった。

ところが、この6月を頂点として、それ以後は小国との外交関係に慎重な配慮をはらう側面も強くあらわれはじめた。とくに注目されるのは、シンガポール、マレーシアに対する態度である。シンガポールでは5月はじめから、新聞粛清の嵐が吹きはじめ、華僑紙「南洋商報」が弾圧され、英字紙「イースタン・サン」「シンガポール・ヘラルド」は廃刊に追いこまれた。これらはいずれも中国、香港、台湾、マレーシアなどの外部勢力と結びついて政府を攻撃したことが理由にされ、「南洋商報」の場合には「一貫して共産主義を賛美し

た」ことが理由とされている。このリ・クエンユー首相の強硬な言論弾圧政策をめぐって、北朝鮮は6月18日に「労働新聞」で論評を発表し、「シンガポールにたいするアメリカ帝国主義の狡猾な破壊策動とのたたかい」として、「シンガポール・ヘラルド」を廃刊させたシンガポール政府の措置を支持した。

また、9月27日には、まだ正式国交のないマレーシアへ、はじめて朴洙権貿易省アジア局長を派遣してマレーシア国営企業機構との貿易交渉を開始した。この交渉は9月30日までつづけられ、朝鮮側はゴム数千トンをはじめ木材・ヤシ油などをマレーシアの船舶によって直接買いつけ（従来はシンガポール経由）、マレーシア側は電解亜鉛設備を朝鮮から買いつけるなど、貿易を活発化する点で合意をみた。朝鮮側が要望した政府間貿易協定の締結および貿易代表部の相互設置の件については具体化しなかったが、翌72年の適当な時期にマレーシア国営企業機構代表が訪朝するという約束ができて、「両国間の友好関係はすでに設立された」（『星州日報』10月1日号）。これは5月から10月にかけて中国・マレーシア間の経済交渉が活発化した事態に対応するものであり、ゴム等の工業原料を北朝鮮が強く欲していることをしめすものである。

この動きが象徴するような経済外交的性格をもふくめて、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国との外交活動はいっそう活発となった。3月には軍事代表団（団長・朴重国少将）がギニアへ派遣され、5月には党・政府代表団（団長・朴成哲第2副首相）がアラブ連合、スーダン、シリア、イラクを歴訪した。また9月から10月にかけてチェコスロバキア、ソ連、ハンガリーに派遣された桂応泰貿易相は、最後にイラクを訪問し、11月には金敬連財政相を団長とする代表団がギニアとタンザニアに派遣された。これに対し朝鮮を訪れた政府代表団としてはアラブ連合（1月）、モーリタニア（4月）、マリ（5月）、スーダン（6月）、アルジェリア（8月）、ソマリア（8月）、タンザニア（9～10月）、イラク（10月）などがあり、コロンビアの国会代表団も9月に訪朝している。

また71年を通じ、10月14日にシエラレオネと、12月20日にマルタと国交関係を樹立しており、10

月6日にはモリシャスと領事関係を設定した。

もちろん、このことは従来の武力解放闘争支援方式の放棄を意味するものではない。プエルトリコ独立運動代表団（5月）、パレスチナ解放戦線代表団（5月、10～11月）、モザンビーク解放戦線代表団（9月）、エリトリア解放戦線司令部メンバー（10～11月）などが訪朝して、金日成、楊亨燮などの要人と会見している。

また、9月にシアヌーク・カンプチア民族統一戦線議長が北京で、「アジアの6つの革命的政府と解放勢力（ベトナム民主共和国、南ベトナム臨時革命政府、ラオス愛国戦線、カンプチア民族統一戦線、朝鮮民主主義人民共和国、中華人民共和国）の会議を招集する準備がすすめられており、中国、朝鮮、カンプチアはこの会議を歓迎しているが、ベトナム側は原則的に賛成しながらも、米帝国主義に関心を集中することが重要だとして、回答をよせない」という談話を発表して注目をあびた（北京、9月10日発 AFP）。これと密接に関連する動きとして、北朝鮮は10月24日に朴成哲第2副首相を団長とする党・政府代表団をベトナムに送り、10月29日に朝鮮、ベトナム経済・軍事援助協定を締結し、共同コミュニケを発表した。

以上のほか71年の対外関係の重要問題としては、南北赤十字会談を中心とする統一問題をめぐる動きがあるが、これは韓国の部にゆずってここでは扱わないこととする。

1971年の北朝鮮の外交・国際活動を通観すると、国際情勢の新しい展開に対応しつつ、めまぐるしいほどに活発な活動を展開したが、その中で特徴的にみられることは、(1)中国に同調しての緊張緩和外交への転換、(2)経済外交を中心とする国際的地位の向上努力、(3)小国および小民族組織に対しての金日成の権威増大の努力である。この中で、(3)の側面は、既述のとおり、(1)(2)と矛盾する要因をはらんでいるので、その展開の仕方が注目される。

国内政治

1. 大衆活動の強化

70年の労働党第5回大会のあとをうけて、大衆団体の大会が次々にひらかれた年であった。

6月21日から28日まで、朝鮮社会主義労働青年同盟の第6回大会がひらかれた。この大会がいちじるしく国際的な性格をおびたカンパニアとして準備されたことは、前記したとおりである。この大会中の6月24日に、金日成首相みずから「青年は代をついで革命をつづけなければならない」という演説を行なって、青年たちを鼓舞した。

ついで10月5日から9日まで、朝鮮民主女性同盟の第4回大会がひらかれた。この大会では金日成夫人である金聖愛が、活動報告を行なった。

さらに12月10日から15日にわたって、朝鮮職業総同盟の第5回大会がひらかれた。この大会では、職業総同盟中央委員会委員長廉泰俊が活動総括報告を行なった。廉泰俊はソ連駐在特命全権大使としてモスクワに駐在中であったが、12月1日に「他の職責につく」ために急きょ召還されたものである。

この後者の2団体の大会には、南朝鮮代表と在日朝鮮人代表以外には、国際代表は参加しなかったことが社労青大会と異なる特色となっている。

この3つの大会は、いずれも労働党第5回大会決定の遂行をちかい、金日成首相の指導に熱烈な感謝と礼讃をささげ、首領金日成の周囲にかたく団結し、忠誠をちかう翼賛大会の様相を呈した。

この3主要大会のほかにも、全国トラクター運転手大会（2月）、全国保健部門活動家大会（6月）、少年団全国連合大会（6月）、全国商業部門活動家大会（9月）、全国教員大会（12月）など多くの大衆団体全国集会在、年間を通じて行なわれた。

2. 党の動き

朝鮮労働党中央の動きとしては、次の2会合が重要である。

中央委員会第5期第2回総会拡大会議（4月19日～23日）

①現国際情勢と祖国の自主的統一を促す問題、②党中央委常務委員会北青拡大会議（1961年4月7日）における金日成指示の執行総括（果樹栽培に関する画期的な方針の実践状況）と当面の経済問題、③人民保健事業に対する党の指導の3議題が討議された。

中央委員会第5期第3回総会（11月15日～23日）

①国際情勢で提起されたいくつかの問題（金日成報告）、②三大技術革命課題の遂行について機械工業部門に提起される課題（金一報告）、③人民消費物資の生産について（朴成哲報告）の議題が討議された。

また、金日成の現地指導による地方党活動の活発化対策が実施された。4月1日には金日成が咸境南道におもむいて党活動の現地指導を行ない、咸境南道党委員会および咸興市党委員連合拡大執行委員会を4月1日～3日、7日～9日にわたって指導した。その後も金日成の直接指導のもとに党平安北道委員会拡大総会（9月6日）、党黄海南道委員会拡大総会（9月20日）などがひらかれている。

3. 最高人民会議と政府の動き

最高人民会議第4期第5回会議が、4月12日から14日までひらかれた。同会議は、①現国際情勢と祖国の自主的統一を促進するために（許淡外相報告）、②朝鮮民主主義人民共和国1970年度国家予算執行にかんする決算と1971年度国家予算について（崔允洙財政相報告）の2議案を審議し、「南朝鮮の同胞兄弟姉妹と諸政党・社会団体の人士におくる朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議アピール」「インドシナ情勢にかんする朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議声明」の2つを採択した。このうち南朝鮮あてアピールは、いわゆる8項目の救国方案を提起したものとして注目される。その主な内容を要約すると、①南朝鮮からのアメリカ軍撤退、②南北朝鮮軍の10万以下への縮小、③「韓米相互条約」「韓日協定」などの廃棄、④外部の干渉を排除した自由な南北総選挙による統一的な民主主義中央政府の樹立、⑤南朝鮮における言論・出版・集会・結社・デモ・ストの自由、政治犯の釈放、南北の全政党、大衆団体、個別人士の政治活動の自由、⑥過渡的対策としての南北連邦制の実施、⑦南北間の経済的交流、文化・芸術・スポーツ分野の相互協力、自由往来と書簡交換の実現、⑧南北政治協商会議の招集、となっている。これはきわめて具体的かつ柔軟な内容をもった提案であり、その後の北側の統一攻勢の基本綱領となった。

内閣組織においては、3月8日に、食料品・日

用品工業省が廃止され、代わって地方工業省が設置された。これは70年にうち出された地方産業の育成対策をいっそう具体化し、すべての食料品・日用品を地方産業によって生産するという方式の確立を示している。

閣僚級の新任異動は、年間を通じ次のとおりである。

1月22日	許龍益	金属工業相に任命
3月10日	曹東燮	電気石炭工業相に任命
3月26日	崔載羽	内閣副首相に任命
5月24日	李根楨	第2機械工業相を解任
〃	韓成龍	第2機械工業相に任命
〃	金応三	第3機械工業相を解任
〃	金鐘成	第3機械工業相に任命
〃	金福信	紡織工業相に任命
6月25日	金敬連	対外経済委員長を解任

財政相に任命

（これにより当然、崔允洙財政相は解任されたものとみられる）

孔鎮泰	対外経済委員長に任命
崔治善	資材供給委員長に任命
金榮致	通信相に任命

これを通観してみると、重要経済閣僚を中心に大幅な異動が行なわれていること、新人が多く起用されていることが、特徴的である。また財政相の重要ポストについての金敬連が、現貿易相である桂応泰とならんで解放後のソ連留学派であり、これまで主として対外経済関係のポストについていた人物であることが注目される。

4. 金日成崇拜をめぐるイデオロギー活動

71年4月15日の金日成59歳の誕生日にさいしては、映画上映旬間や歌ごえ集会や研究討論集會がもたれただけで、例年に比していちじるしく地味に祝われた。けれども、年間を通じ、金日成のこれまでの諸労作に関する記念討論集會や、重要法令、重要会議などの記念集會がすべて金日成の業績を記念するものとしておびただしく行なわれ、また前記したような大衆団体の大会でも、それらの団体の創立者としての金日成に対する感謝と讃仰の念が熱烈に表明された。

また71年の指導者の諸演説では「4000万朝鮮人

民の父なる首領金日成同志」ということばがさかんに用いられるようになった。そのねらいは民族的「家父長」としての金日成首相のあたたかい配慮と慈愛を強調するところにある。

また、この年の特徴として、交流のある各国の元首や指導者の60歳の誕生日に、必ずといってよほど祝電が送られていることが目立っている。これらの動きを、後記のように72年4月15日の金日成60歳誕生日以前に6カ年計画2年分の課題を超過遂行する運動が全国的に起こされたこととあわせ考えると、本年の行事はひかえ目にしながら、72年の金日成還暦の日を最大の国際的祝祭日とすべく、着々と多方面の準備をととのえているようである。

そのような準備のひとつとして、映画制作の活発化も本年の目立った現象であった。主なものを数えても、劇映画としては「輝かしい星」「2人の作業班長と2人の戦士」「リングのなるころ」「学父兄」「赤いリボンを探し求める少女」「太白山に春がくる」「機関士の息子」「鐘が鳴る」などが、長編記録映画としては「朝鮮労働党第8回大会」(天然色)、「家禽業にまつわる父なる愛情」、「きょうのテアン」(天然色)、「国内革命戦跡地を訪れて」(天然色)などがつくられて、金日成思想を中心とするイデオロギー統一に大きな役割をはたした。

経 済 建 設

1971年は、3大技術革命を目標とする野心的な6カ年計画の初年度にあたるため、目標を超過達成しようとする運動が精力的に展開された。

1. 第2次チョンリマをめざす動き

党機関紙「労働新聞」は、1月2日に「偉大な首領がさし示した社会主義建設の雄大な綱領を遂行する第1年目の戦闘で輝かしい勝利をかちとろう」、1月5日に「党は6カ年計画の初年度課題を輝かしく完遂するための『百日戦闘』へよびかける」、1月17日に「首領に限りなく忠実な青年たちは、近衛隊、決死隊の榮譽をいっそう輝やかせよう」などの社説をかかげて、勤労者および青年のけっ起をよびかけた。とくに、17日の社説は

「6カ年計画のもっとも困難で、もっとも骨が折れ、もっとも大切な部門に青年をひきつづき進出させ、人民経済のすべての戦線で青年突撃隊運動を活発にくりひろげて、生産と建設をひきつづき高揚させ、生産力をたえまなく発展させなければならぬ」とのべて、青年突撃隊運動を最前線に立てることによって、計画の超過遂行をはかろうとする意気どみを示した。各産業部門・建設部門で、前年度にめざましい成果をあげた模範労働者たちを、金日成首相が表彰し、贈物をおくる儀式は、例年のとおりさかんに行なわれた。さらに、この年には重要建設作業に従事する労働者と青年突撃隊に贈物をおくって激励する儀式が、しきりに開かれたことが目立っている。たとえば、2月14日には、西頭水青年発電所建設事業所の建設者たちに、3月21日には伊川—洗浦間青年鉄道建設に参加する全国青年突撃隊員に、4月10日には南新義州—徳川間鉄道建設に従事する模範鉄道建設者と平安北道内青年突撃隊に、11月20日には首都建設青年突撃隊に、11月30日に海州—伊川間鉄道建設に従事する建設者と青年突撃隊員に贈物が渡されている。これらをみると、重要な建設事業に青年突撃隊が全面的に動員されていること、またとくに鉄道建設に集中的な努力がはらわれていることが明らかである。

6カ年計画超過完遂運動を、年頭のよびかけ段階からさらにもう一步エスカレートさせるために、金日成首相自身の現地指導がふたたび大きな役割をはたした。その焦点となったのは、2月20日から21日にわたって行なわれた熙川工作機械工場の現地指導である。この指導の下に、同工場労働者は2月21日に従業員集会をひらいて、翌72年4月15日(日金日成の生誕60年記念日)前までに1万台の工作機械を生産することをちかった。この1万台という数字は6カ年計画末の生産水準の1.3倍突破という驚異的なものである。同工場労働者は、3月3日にふたたび従業員会議をひらいて、72年4月15日以前に、6カ年計画の2年分の課題を超過遂行しようという社会主義競争を、全国の工場、企業所の労働者、技術者、事務員によびかけた。このよびかけにこたえて、3月23日までの20日間のあいだに、全国4,450余の工場、企業所で従業員会議がひらかれて、翌年4月15日以前に

2年分を超過遂行することを誓った。

このように熙川工場を突破口とする新しいチョンリマ運動の波が起ったため、4月16日の朝鮮中央通信は、「百日戦闘」の結果を総括し、71年度計画の第1四半期分が完遂されたことを誇らしげに報告することができた。

その報告は、電力、石炭、鉄鉱石、圧延鋼材、化学肥料、農薬、化学繊維、合成樹脂、セメント、マグネシアクリンカーなどの生産量が、前年同期よりはるかにのびたこと、西頭水発電所、原油加工工場、金策製鉄所の鉄鋼・圧延職場、江界紡織工場など重要施設の建設が進捗したこと、9・25セメント工場、沙里院紡織工場、銀山炭鉱設備付属品工場、海州鑄鉄管工場などが完成あるいは操業開始にいたったこと、伊川―洗浦間の鉄道工事が進捗し、南新義州―徳川間の鉄道100余キロが2カ月余で建設されたこと、5万町歩余の畑かんがい工事が2カ月で終了したことなどを具体的に列挙している。

その後、各地で奮起した労働者により、さまざまの「奇跡」が生じたことが報道された。たとえば、新義州紡績工場の1精紡工は一人で6,800錘を受け持ってわずか9日間に初年度計画をなしとげ、1梳棉工は120台の梳棉機を受けもって13日間に1年分をやりとげ、4月15日には目標をくりあげ完遂したこと、また亀城紡績工場の1織布工も5月9日に計画をくりあげ完遂したことが報じられ(5月12日報道)、またウングク炭鉱電車工場の3つの青年突撃隊が、「石炭こそ6カ年計画の最初の突破口である」との金日成教示をつらぬくため、毎日計画の5～6倍の作業をなしとげ、6カ年計画の2年分の課題をあいっいで完遂したこと(5月17日報道)、清津造船所では5,000トン級の大型旅客船をわずか2カ月足らずで建造したこと(5月18日報道)などが報じられた。こうした動向は、翌年4月15日の金日成還暦の日をめざして、第2次チョンリマの奇跡を実現しようという努力が、この時期に集中的にあらわれたことをしめしている。

金日成首相は、なお年間を通じて、現地指導方式を精力的に展開した。主なものをあげると、4月4日新浦市内の水産部門工場・企業所、9月3日亀城地区工場・企業所、9月4～5日新義州地

区工場・企業所、10月9日熙川工作機械工場(2回目)および熙川地区工場・企業所などである。

こうして、年間を通じ、おおいにおおられた第2次チョンリマの「奇跡」が、どの程度まで、全般の生産を上げ、技術革新を達成することに寄与したかは、まだ明らかにされていない。

ただ、12月にひらかれた前記の職業総同盟大会において報告されたところをみると、慈江道の自動化要素・機具工場で11月30日までに6カ年計画の課題(年間のものと思われる)を6倍に超過遂行したこと、両江道ヨンアム林産事業所クルソン作業所の1伐採工が6カ年計画の4年分の課題をなしとげたこと、咸鏡北道の造船所が1,000馬力大型しゅんせつ船を建造したのにつづいて2万3750トンの大型船尾トロール船を建造し、さらに横進水台を建設して5,000トン級大型船舶を横進水させる奇跡と革新をひき起したこと、チョンリマ沙里院栄誉軍人工場が昨年比120パーセントに増大した本年度計画を4カ月くりあげ達成したことなどが列挙されているが、これらはいずれも局部的か断片的な成果にすぎない。また12月6日の朝鮮中央通信は、東海地区の水産労働者を先頭にして、全国的にハタハタ漁において本年度計画を2倍以上超過遂行し、6カ年計画を2年分完遂したと報じている。これらを通観したところ恐らく、現在はまだこれらの突動的な成果を喧伝することによって、労働者全体の士気を鼓舞し、競争意欲をかきたてることを通じて、全体の水準を急速に引きあげ、7カ年計画の不成績を挽回しようという地点にあるものと思われる。前年の1970年度にも、7カ年計画最終年度の目標を達成するために相当むりをしてきたことであるから、さらにひきつづいて目標を達成するためには、青年突撃隊の全面的動員と、労働者の超人的な努力による「奇跡」に期待する以外になくなっているのである。この第2次チョンリマの奇跡がはたして実現するかどうかは、72年4月15日までまたなければならぬ。

2. 1971年予算の性格

例年の財政報告が、北朝鮮の経済建設の総体的な実態を知るための貴重な手がかりとなっているが、71年度の財政報告は、前年の好調を反映して、いつになく詳細なものであった。最高人民会

財政規模の推移

(単位: 万ウォン)

年次	予(歳同)算(出額入)額	対加前率(%) 増	予 算 執 行 額			
			歳入額	対加前率(%) 増	歳出額	対加前率(%) 増
1964年	343,482	—	349,878	—	341,824	—
1965年	372,172	8.4	(未発表)	—	(未発表)	—
1966年	375,276	0.8	375,270	—	357,140	—
1967年	396,490	5.7	416,603	11.0	394,823	10.6
1968年	523,440	32.0	502,370	20.6	481,289	21.9
1969年	599,542	10.7	531,930	5.9	504,857	10.5
1970年	618,662	11.6	623,200	17.2	600,269	18.9
1971年	727,727	16.1				

出所: 各年財政報告による。

議第4期第5回会議の第2日目にあたる4月13日に崔允洙財政相報告「1970年度国家予算執行にかんする決算と1971年度国家予算について」によって、その内容を概観しておこう。

まず、財政規模を従来のもものと比較してみると、上表のとおりである。

この表でみると、予算額は1968年以降急速な膨張傾向に向かっており、またその執行決算額は68年、70年に高い増大率を示している。また68~9年には執行決算額が歳出入とも、予算額を下まわったのに対し、70年にいたって、執行歳入額が予

財政投資の部門別推移

(対前年比: %)

	1969年		1970年		1971年
	予 算	同執行	予 算	同執行	予 算
人民経済投資	127	—	119	123	—
基本建設投資	137	111	130	130	134
電力採取部門	150	—	160	—	—
電力建設	—	220	—	—	150
石 炭	—	—	—	—	130
鉄 鋼 部 門	—	—	—	—	150
機械工業部門	—	—	—	—	140
化学工業部門	220	—	290	160	280
建材工業部門	200	130	190	180	—
軽工業部門	200	130	230	—	130
運輸部門	150	—	150	—	140
水産部門	—	210	170	—	—
農業部門	130	—	110	—	120
社会文化施策費	132	120	124	120	120
住 宅	—	220	210	—	170
教育事業	—	110	120	—	130
託 児 所	—	—	140	—	150
保健事業	—	120	—	121	120

出所: 各年財政報告による。

算を上まわった。このことは、7カ年計画最終年度にラストヘビーの大増産が行なわれたことを反映して、70年の財政収入が好調だったことをあらわしている。

次に最近の財政投資の内容を部門別に整理してみると、次表のとおりである。この数字はすべて対前年比だけで示されているため、その実額規模は把握できない。しかし、投資重点の推移、ならびに計画と実績のくいちがいなどを知るための手がかりとなる。

この推移で特徴的なことは、化学工業部門に年々重点的な投資を行なう予算が組まれながら、難航していることである。これは原料となる石炭、石油が隘路になっていることをしめしている。また、国民生活にもっとも関係の深い軽工業、農業、社会文化施策費などの投資額の増加率が、他にくらべると横ばいないし漸減の傾向をもって推移していることである。このことは、前記のように内閣の食料品・日用品工業省を廃止して地方工

1971年予算における生産目標

品 目	倍 数	推計実数量
石 炭	1.2倍	3300万トン
圧延鋼材	1.4倍	145万トン ¹⁾
化学肥料	1.2倍	180万トン
農 業	1.5倍	—
化学繊維	1.7倍	54,700トン
合成樹脂	2.3倍	9,200トン
セメント	1.3倍	520万トン ²⁾
工作機械	2.6倍	—
貨物自動車	1.2倍	—
パ ス	2.0倍	—
トラクター	2.1倍	44,100台
発 電 機	1.2倍	—
発 動 機	1.4倍	—
織 物	1.2倍	4.8億m
下 着 類	1.1倍	—
皮 革	2.1倍	—
紙	1.2倍	13.6万トン
漁 獲 高	1.2倍	—
肉	1.3倍	—
卵	2.2倍	15.4億個
野 菜	1.5倍	—
果 物	1.4倍	46.7万トン
住 宅	2.2倍	—

注: 1) 7カ年計画実績はただの「鋼材」, 2) 7カ年計画実績は500万トン能力となっているが、これを実績400万トンとして推計した。

業省を設置した事実からもわかるように、生活必需品部門については、国家から地方に肩替わりしつつあることの反映ともみられる。

また71年度予算の編成で注目されることは、年間の生産目標および建設目標をかなり具体的に打ち出していることである。

このうち生産目標について、報告では対前年比倍数しかあげられていないが、これに7カ年計画実績などから推計する実数量を付記したものは表（前ページ）のとおりである。

このうちとくに重点がおかれているとみられるのは、工作機械、合成樹脂、バス・トラクター、皮靴、卵、住宅である。

この財政報告中で、とくに具体的に力説されている表現をひろってみると次の通りである。

「われわれは今年、なによりもまず石炭工業部門を先行させることに大きな力をふりむけるようになります」「金属問題を解決することは、全般的な人民経済計画を成功裡に遂行するための基本的な環の一つであります」「冶金工業を急速に発展させるためには鉱業を決定的に先行させなければなりません」「6カ年計画の中心課題である大技術革命課題をりっぱに遂行できるかひなかは機械工業に大にかかっています」「輸送の緊張をときほぐすことは、現在国の経済建設を促進し、とくに当面今年度の計画を成功裡に遂行するために提起されるきわめて切実な課題であります」

これらを総括するような形で、もう一度くりかえすように「われわれは今年、まず全般的6カ年計画遂行の鍵的な環となる石炭工業と運輸部門の緊張を解きほぐすことに力量を集中し、機械工業、金属工業をはじめとする人民経済のすべての部門が、石炭工業を積極的に支援し、炭鉱作業の機械化と総合的機械化で決定的な前進をとげることによって、人民経済の増大する石炭需要をいっそうよく充足させなければなりません」ということがいわれている。石油資源を国内にもたない北朝鮮では、石炭が火力発電用、燃料用（家庭および鉄道輸送）、合成化学原料用などに用いられるため、経済規模の拡大にともなって、重大な隘路となって登場しつつある模様である。

このほか、財政報告で注目されるのに「今年、わが国地方経済は1956年の約32倍に達する収入を保障し、地方の増大する支出を自力で円滑にみたしたうえで4億ウォンに達する資金を中央に上納することになります」と地方財政についてはじめて言及したこと、「今年も国家予算支出総額の30%にあたるぼう大な資金を国防費にふりむける」ことを確認したこと、「すべての部門、すべての単位で輸出品生産計画を無条件保障する厳格な規律をたて、外貨をより多く獲得するための全大衆運動をひきつづき力強くくりひろげなければなりません」と輸出重視政策をうち出したこと、「原価を計画より2%以上引下げたたい」をよびかけたことなどである。

3. 機械工業の課題

前記のとおり、71年には2回の党中央委総会がひらかれ、経済問題としては「果実増産」「機械工業部門の課題」「人民消費物資の生産」の3つが議題とされている。

とくにこの中で11月総会でとりあげられた「機械工業部門の課題」は、具体的な内容をもっているため注目にあたいる。この総会では、熙州、亀城、万景台の機械労働者たちの奮起によって、工作機械の生産で一大飛躍がなしとげられたため、3大技術革命の勝利の突破口がきりひらかれたことを高く評価した上で、具体的課題を次の3つに整理して提起している。(1)工作機械工業のいっそうの発展と品種の増大、(2)自動車、トラクター、連結農業機械など農業機械の増産、(3)電子工業発展のための研究活動・教育普及活動の強化と中小規模自動化計器機具分工場の広範な建設。なお「労働新聞」11月27日号は「3大技術革命の戦闘的旗じるしを高く掲げ、機械工業の発展で新たな転換をおこそう」という社説をかかげて、この中央委総会の討議内容をくりかえしてのべた。この中では、(2)にあたる農村の機械化と技術革命の目標として、「農村労力1人が水田を5～6町歩、畑は8～10町歩以上扱い、協同農場でも工場、企業所でのように8時間労働制を実施し、労働条件において都市と農村間の差異をいちじるしくちめる」という具体的な内容をかかげた。

重 要 日 誌

1 月

1日 ▶金日成首相は中国の党・政府指導者、ソ連の党・政府指導者と年賀状を交換。

▶統一革命党中央委員会より金日成首相へ年賀状を送る。

2日 ▶「労働新聞」社説、「偉大な首領がさし示した社会主義建設の雄大な綱領を遂行する第1年目の戦闘で輝かしい勝利をかちとろう」

5日 ▶「労働新聞」社説「党は6カ年計画の初年度課題を輝かしく完遂するための『百日戦闘』へ呼びかける」

▶「労働新聞」論説「南朝鮮侵略で新たな危険な歩みをふみだした日本軍国主義者の犯罪的策動をだんこ粉砕しよう」

▶元韓国軍兵士で日本亡命ののち共和国に入った丁熙尚、ピョンヤンで記者会見。

15日 ▶「労働新聞」社説「反帝闘争の革命的旗じるしを高くかかげてアメリカ帝国主義と日本軍国主義に反対していっそう断固たたかおう」

18日 ▶朝鮮・ハンガリー1971年度保健・医学科学部門の協力計画書ピョンヤンで調印。

20日 ▶共和国政府文化代表団セイロンに出発。

▶全国青年熱誠者会議開かれる。

21日 ▶日本法務省、2月7日札幌で開かれるプレ・オリンピック参加の共和国選手団入国を認める。

22日 ▶許奄益を金属工業相に任命。

▶政府、ノロドム・シアヌーク親王とカンプチア民族統一戦線中央委員会政治局および王国民族連合政府の1月18日付けアピールと1月19日付け声明支持を発表。

▶外務省、インドシナ全域で侵略戦争を拡大しようとする米帝を糾弾し声明発表。

▶ピョンヤンで70年12月26日以来開かれていた朝中国境河川航運協力委員会第10回会議終了。

23日 ▶労働党各道（直轄市）党委員会総会開かる。

25日 ▶朝鮮・ハンガリー1971年度商品流通支払協定締結。

26日 ▶ソ連政府通商代表団訪朝。

27日 ▶朝鮮・キューバ1971年度通商に関する議定書調印。

▶プレ・オリンピック選手団、札幌へ出発。

29日 ▶共和国は日本・韓国間の日本文化センター設立

協定締結に関連して「日本軍国主義の南朝鮮に対する思想的、文化的侵略が全面的な段階に入った」と非難。

30日 ▶朝ソ政府間経済および科学技術協議会第6回会議に参加のためソ連政府代表団訪朝。

▶金日成首相、29日に訪朝したアラブ連合親善代表と会見。

▶共和国は在日朝鮮人中央教育会に38回目の教育援助金、奨学金3億236万5000円を送金。

▶第4回在日朝鮮人祖国訪問団、第一陣が成興に到着（2月3日ピョンヤン着）。

2 月

1日 ▶「労働新聞」社説「敬愛する首領が在日同胞にめぐらす肉親的な配慮」

2日 ▶金日成首相、ソ連政府代表団団長ノビコフ副首相と会見。

3日 ▶朝ソ政府間経済・科学技術協議委員会第6回会議議定書調印。

4日 ▶朝鮮・ドイツ間、ラジオ・テレビ協力協定締結。

▶金日成首相、党の軍事路線をつらぬく上で模範を示した朝鮮人民軍軍人を表彰。

5日 ▶朝日両赤十字代表団会談、帰国問題に関する合意文書に調印、声明発表。

▶外務省、インドシナに対するアメリカ軍侵略戦争拡大策動を糾弾して声明発表。

6日 ▶金日成首相、第5回党大会に参加した在日朝鮮人祝賀団と会見。

▶在日本朝鮮人総連合会第9回全体大会を祝うピョンヤン市民大会開かれる（徐哲演説）。

7日 ▶周恩来中国総理、駐中朝鮮大使玄峻極と会見。

▶「労働新聞」論評「韓米連合大空輸作戦訓練」を糾弾。

9日 ▶「労働新聞」社説「偉大なチョンサンリ方法を徹底的に貫徹してわれわれの革命偉業をはやめよう」

15日 ▶政府、インドシナ人民に反対する犯罪的侵略戦争をいっそう拡大する米帝の策動を糾弾して声明発表。

17日 ▶板門店軍事停戦委で、共和国は3月3日から始まる米・韓空輸フリーダム・ボルト（自由の跳躍）作戦、米の1億5000万ドル対韓特別軍事援助の約束を戦争挑発を企図するものと非難。

19日 ▶共和国保健省と民主ドイツ保健省間に協力計画書調印。

20日 (～22日) ▶金日成首相、チョンリマ熙川地区の工場、企業所の仕事を現地指導。

21日 ▶朝鮮中央通信社とパキスタン国際通信社間に報道交換協定調印。

25日 ▶共和国外務省、インドシナにおける米帝の侵略戦争拡大策動を糾弾して声明発表。

▶3・1 人民蜂起52周年ピョンヤン市記念集会 (最高人民会議白南雲議長報告)。

3 月

4日 ▶ドイツ政府通商代表団訪朝。

5日 ▶3月5日を農業労働者デーに制定する政令発表。

6日 ▶金日成首相、4日から来朝中のカンボジア王国民族連合政府代表団と会見。

▶軍事代表団ギニアへ出発 (団長、朴重国少将)。

8日 ▶最高人民会議、食料・日用品工業省を廃止、地方工業省を設置。

▶朝鮮・ルーマニア貿易銀行間の清算決済に関する協定締結。

9日 ▶朝鮮・ドイツ長期通商協定(71～75年)、1971年度商品相互供給に関する議定書調印。

▶全国煽動員・五戸担当宣伝員熱誠者大会開催 (党中央委金国泰報告)。

10日 ▶曹東変を電気石炭工業相に任命。

▶朝鮮・アルバニア商品相互供給・支払協定書調印。

▶政府代表団(金斗三団長)、ドイツへ出発。

11日 ▶金日成首相、第4次在日朝鮮人祖国訪問団と会見。

13日 ▶外務省、米帝の北ベトナムにたいする爆撃と砲撃を糾弾して声明発表。

▶世界卓球選手権大会参加の共和国選手団全員の日本入国認められる。

▶軍事代表団、モンゴルへ出発 (団長、池炳学上将、副民族保衛相)。

15日 ▶メキシコのバルガス司法長官が記者会見。メキシコで現政権を転覆、共産政権を樹立しようとしたゲリラが北朝鮮で訓練を受けたことを明らかにする。

16日 ▶ベトナム人民代表団訪朝。

17日 ▶政府貿易代表団ポーランドへ出発。

▶朝・中韓緑江水力発電会社理事会および監事会会議決定書調印。

20日 ▶韓国内務省発表によると、共和国は朝鮮戦争以降抑留していた韓国漁民を釈放、韓国に送りかえす。

22日 ▶金日成首相、ベトナム人民代表団 (団長ブイ・クアン・タオ建設相) と会見。

▶外務省、日本政府の「出入国管理法案」を糾弾し声明発表。

25日 ▶毎年4月6日を「植樹デー」に制定。

26日 ▶崔載羽を内閣副首相に任命。

28日 ▶ソ連共産党第24回大会に参加する労働党代表団ソ連へ出発。

▶朝鮮・ポーランド長期貿易協定および1971年度商品相互納入・支払議定書調印。

30日 ▶モンゴル政府通商代表団訪朝。

4 月

1日 (～3日) 金日成首相、咸鏡南道の党活動にたいする現地指導を行ない、咸鏡南道党委員会、咸興市党委員連合拡大執行委員会 (9日まで) を指導。

2日 ▶在日朝鮮人教育援助金奨学金 (100億 2000 万余円) に感謝する、在日朝鮮人代表団訪朝。

4日 (～5日) ▶金日成首相、新浦で東海地区水産部門活動家協議会を指導し、新浦市内の水産部門の工場、企業所の事業を現地指導。

7日 ▶金日成首相、4日に来朝したモーリタニア回教共和国政府代表団と会見。

▶カナダのラング小麦委員会担当相は、北朝鮮に小麦10万トンを売却したと発表。4月末から8月末に積出される。

9日 ▶朝鮮・モーリタニア経済技術協力協定調定。

12日 (～14日) ▶最高人民会議第4期第5回会議 (議長白南雲) 開幕。第1日、許淡外相報告、「現国際情勢と祖国の自主的統一を促進するために」——南北の代表が板門店、または第3国で統一問題の会談を開くことを提案。

13日 ▶最高人民会議2日目——崔允洙財政相の報告「70年度国家予算執行決算と71年度国家予算について」

▶同会議「南朝鮮の同胞兄弟姉妹と諸政党、社会団体の人士におくる民主主義人民共和国最高人民会議アピール」および「インドシナ情勢にかんする朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議声明」採択。

14日 ▶最高人民会議閉幕——歳出入とも72億0772万ウォンからなる71年度予算に関する法令を全員一致で採択。

▶「労働新聞」社説「南北の愛国勢力は力をあわせて現難局を打開し祖国の自主的統一をなしとげよう」

15日 ▶セイロン駐在共和国大使館は、朝鮮人がセイロン政府転覆の陰謀に加わったとの理由で閉鎖を要求される。

▶南朝鮮同胞向けのピョンヤン放送は、開城テレビ放送が15日から始まり、放送時間は毎日午前8時からと放送。

16日 ▶セイロン政府はコロンボ駐在朝鮮大使館、職員全員を国外追放。

▶「労働新聞」社説「インドシナ人民の反米救国闘争は必ず最後の勝利をとげるであろう」

17日 ▶軍事代表団、ルーマニアへ出発（団長、呉振宇人民軍総参謀長）。

19日（～23日）▶朝鮮労働党中央委員第5期第2回総会拡大会議開かれる。

▶「労働新聞」社説「南朝鮮人民は、反ファッショ民主化の旗じるしのもとに万古の逆賊朴正熙逆徒を一掃しよう」

20日 ▶外務省、朝鮮、セイロンの事態に関連して声明発表——「セイロン外務省当局者の非友好的な措置の背後には、わが国の権威をそこね、両国関係を破壊しようとする米帝と反動の陰險な謀略があることは明白である」

26日 ▶金日成首相、20日に訪朝したアラブ復興社会党・イラク政府代表団と会見。

27日 ▶朝鮮、スーダン間にラジオ・テレビ放送分野での相互協力協定調印。

28日 ▶キューバ共和国を訪問する朝鮮政府経済代表団出発。

30日 ▶5月21日を「共和国建設者節」に制定する政令発表。

5 月

4日 ▶金日成首相ハンガリー貿易相と会見。

5日 ▶党・政府代表団アラブへ出発。

6日 ▶モスクワ放送によればポドゴルヌイ・ソ連最高会議幹部会議議長は朴成哲第2副首相と会見——両国間の友好関係を発展させる問題、双方に関心のある当面の国際問題について意見交換。

7日 ▶金日成首相、在日朝鮮人代表団と会見。

10日 ▶金日成首相、マリ共和国政府代表団と会見。

12日 ▶ドイツ民主共和国外務省代表団訪朝。

▶「民主朝鮮」資料論説「南朝鮮にたいする経済的侵略をいっそう強化している日本軍国主義者の犯罪的策動」

14日 ▶共和国代表団スーダン訪問へ出発。

16日 ▶在日朝鮮人帰国再開第1次船、清津港に到着。

18日 ▶5,000トン級大型旅客船「万景峰」号完工式挙行。

▶党・政府代表団（団長、朴成哲副首相）シリア政府

の招きでダマスカスに到着。

23日 ▶労働党代表団、チェコスロバキア共産党第14回大会出席のため出発。

24日 ▶最高人民会議常任委、一部閣僚を任命する政令発表。

25日 ▶「労働新聞」編集局論説「総連結成16周年を熱烈に祝う」

31日 ▶金日成首相、帰国再開第1次船で帰国した在日朝鮮人と会見。

6 月

1日 ▶金日成首相、スーダン民主人民共和国政府親善代表団と会見。

2日 ▶共和国外務省「米日合同対潜水艦訓練」を糾弾声明。

3日 ▶金日成首相、中国記者団と会見。

5日 ▶モンゴル人民革命党第16回大会に参加の労働党代表団出発。

7日 ▶チリ社会党代表団（カルロス・アルタミラノ・オレゴ書記長）、チリと共和国の間に近々外交を樹立すると宣言。

7日 ▶ルーマニア党・政府代表団訪朝（団長、チャウシェスク党書記長兼国家評議会議長）。

11日 ▶方泰律副貿易相ポーランドへ出発。

12日 ▶軍事停戦委第317回会談開かれる——非武装地帯の平和利用を中心とするロジャーズ提案示される。

13日 ▶労働党代表団、ドイツ社会主義統一党第8回大会参加のためピョンヤンを出発。

15日 ▶朝鮮とルーマニア党・政府代表団の間で共同コミュニケ発表——ルーマニア側は金日成首相夫妻を自国に招待、金日成受諾を表明。

16日（～18日）▶労働党平安南道委員会拡大総会開く。

19日 ▶「労働新聞」社説「沖繩返還協定」と関連して「米日の反動的な結託を決定的に破綻させなければならない」

20日 ▶外務省「沖繩返還協定」糾弾声明発表。

▶外務省、佐藤首相とアグニュー米副大統領の韓国訪問を糾弾、声明発表。

▶第157次（在日朝鮮人）帰国船清津港に到着。

21日（～28日）▶朝鮮社会主義労働青年同盟第6回大会開幕。

22日 ▶最高人民会議、便宜サービス部門の働き手に対する功勳称号制定の政令発表。

24日 ▶社労青大会第4日め、金日成首相演説「青年は代をついで革命を続けなければならない」

25日 ▶「反米闘争デー」ピョンヤン市民大会。

▶最高人民会議、一部閣僚を任命する政令発表。

28日 ▶韓国に対する日本の再侵略糾弾、ピョンヤン市抗議集会開かれる。

▶社労青大会、在日朝鮮人青年学生におくる社労青第6回アピール採択。

29日 ▶金日成首相、社労青大会に参加した南朝鮮青年革命組織代表団団長、在日朝鮮人青年学生祝賀団と会見。

7 月

3日 ▶朝中政府間に海難救助協力協定調印。

5日 ▶朝ソ友好・協力および相互援助条約締結10周年に際し、金日成首相、崔庸健委員長とソ連の党・政府指導者祝電交換、祝宴催す。

▶ソ連の党・政府代表団訪朝(団長、マズロフ副首相)

6日 ▶朝ソ友好協力・相互援助条約締結10周年ピョンヤン市記念大会開く。

7日 ▶金日成首相、ソ連の党・政府代表団と会見。

8日 ▶党・政府代表団モンゴルへ出発。

9日 ▶「朝中友好週間」始まる。

10日 ▶朝中友好・協力および相互援助条約締結10周年に際し、金日成首相、崔庸健委員長と毛沢東主席、林彪副主席、周恩来首相と祝電交換——記念日に祝電交換は1966年の5周年の時以来。

▶イエメン政府代表団訪朝。

11日 ▶朝中友好・協力・相互援助に関する条約締結10周年ピョンヤン市記念大会開かる。

12日 ▶カンボジアのノロドム・シアヌーク親王、北京で、朝鮮の党・政府代表団(団長、金件麟党中央委秘書)と会見。

13日 ▶金日成首相、訪朝中の中国党・政府代表団(団長、李先念副首相)と会見。

14日 ▶「ベトナム人民反米救国闘争支持週間」始まる。

▶「労働新聞」論評「在日朝鮮人学生にたいする継続的な暴行は直ちに阻止されるべきである」

18日 ▶在日朝鮮人第158次帰国船、清津港に到着。

21日 ▶金日成首相、15日に訪朝したレバノン国会代表団と会見。

22日 ▶イエメン・アラブ共和国副外相訪朝。

▶カンボジアのノロドム・シアヌーク親王一行訪朝。

24日 ▶金日成首相、シアヌーク親王と会談。

▶外務省スポークスマン、在日朝鮮人学生にたいする迫害と弾圧が激化していることと関連して声明発表。

29日 ▶朝鮮軍事休戦委員会第319回本会議で朝鮮側が

7項目要求を提出——(1)米軍は直ちに戦争政策をとりやめ、在韓米軍を撤収させよ。

(2)日本の軍国主義者を引入れるような犯罪的活動を直ちに中止せよ。

(7)南北朝鮮人は自分の国、自分の土地を休戦協定の要求に基づいて境界線を越えて自由に往来できるようにせよ、等。

8 月

1日 ▶金日成首相、7月30日に訪朝したシエラレオネ共和国政府代表団と会見。

2日 ▶朝鮮・シエラレオネ共和国共同コミュニケ調印発表。

3日 ▶朝鮮赤十字会中央委、日本当局が共和国船員を抑留していることで日本赤十字社に電報。

5日 ▶在日朝鮮人の教育援助金・奨学金を送金(3億0191万円)。

▶ピョンヤン主要紙、金日成の「党の立場と思想を固守する革命闘士になれ」発表25周年に際して「わが党の主体思想で徹底的に武装しよう」発表。

6日 ▶金日成首相、ノロドム・シアヌーク親王歓迎ピョンヤン市民大会ではじめてニクソン訪中計画にふれて演説、また「われわれは南朝鮮の民主共和党を含むすべての政党、大衆団体および個人たちといつても接触する用意がある」と言明。

▶アルジェリア政府代表団訪朝。

▶朝鮮赤十字会中央委員会声明、日本当局が漂着した朝鮮の船員を抑留し審問している事実を糾弾。

8日 ▶金日成首相、アルジェリア政府代表団と会見。

▶「労働新聞」社説「歴史の流れに逆らうことはできない」

10日 ▶カンボジア王国民族連合政府外相訪朝。

11日 ▶朝鮮・カンボジア王国の共同コミュニケ発表。「朝鮮、カンボジア、中国、ベトナム、ラオスをはじめとするアジアの兄弟諸国の反帝反米統一戦線を一層強化することが必要だと認める」

▶祖国平和統一委員会、海外在住朝鮮人の南北統一会議を第三国で開くことに同意することを表明。

12日 ▶崔斗善大韓赤十字社総裁、北朝鮮に家族捜し運動提唱。

14日 ▶共和国赤十字会中央委員会孫成弼委員長、南北朝鮮赤十字社代表の会談をもつことと関連して、大韓赤十字社総裁に手紙をおくる。——書簡の内容は9月中に板門店で予備会談を開くこと、議題は、(1)南北間の家族、親せき、友人の自由往来と相互訪問、(2)南北間の手紙の相互交換、(3)南北間で家族捜しをやること等。

▶大韓赤十字社崔総裁，共和国の回答を全面受諾，20日板門店で初の接触が決まる。

▶日本外務省，日朝協会唐笠事務局長に共和国行の旅券を出す。

15日 ▶朝・中経済協力協定，北京で調印。

16日 ▶金日成首相，12日に訪朝したソマリア民主共和国政府代表団と会見。

▶日本法務省，在日朝鮮人18人の祖国訪問，日本再入国を許可。

▶17日 ▶共和国赤十字会中央委員会スポークスマン，南北朝鮮赤十字社派遣員の文書交換，手続きと関連して談話発表。

▶共和国外務省，日韓協力委員会，日韓定期閣僚会議を糾弾して声明発表。

▶朝鮮・アルジェリア共同コミュニケ発表。

▶18日 ▶軍事代表団（団長，呉振宇人民軍総参謀長），中国へ出発。

▶在日朝鮮人帰国事業のため，新造船した万景峰号清津に入港。

20日 ▶板門店で南北朝鮮赤十字社派遣員，文書を交換。

23日 ▶共和国赤十字会中央委スポークスマン談話発表——21日の崔総裁の提案を受けとるため26日，2人の派遣員を板門店に送ることを表明。

25日 ▶周恩来総理，訪中朝鮮軍事代表団と会見。

26日 ▶板門店で南北赤十字社派遣員2度目の会合，大韓赤十字社総裁からの手紙受けとる。

27日 ▶共和国赤十字会中央委員会孫委員長，崔総裁に回答書簡——予備会談を9月20日午前11時に繰上げることを提案。同書簡を30日正午，板門店で伝達したい旨言明。

30日 ▶南北赤十字社派遣員，板門店で3度目の会合。

▶金日成首相，マレーシア独立14周年に際しラザク・マレーシア首相にメッセージを送る。

31日 ▶ポーランド副外相訪朝。

▶フィンランド代表団訪朝。

▶大韓赤十字社崔総裁，共和国赤十字会の逆提案に対し「好意的に同意する」回答発表——9月3日正午，板門店で文書伝達，予備会談は20日午前11時，板門店で開催すること決定。

▶日本，クラレ技術者5人派遣——合成繊維ビニロン製造法について技術指導するため，25日5人の技術者を派遣したことを明らかにする。

9月

3日 ▶金日成首相，亀城地区の工場，企業所を現地指

導。

▶共和国政府とユーゴスラビア政府間に大使級外交代表を派遣することで合意。

▶板門店で南北両赤十字社派遣員，4度目の会合。

4日（～5日） ▶金日成首相，新義州地区の工場，企業所を指導。

6日 ▶朝鮮・中国間に軍事援助を無償で提供することに関する協定締結。

▶「労働新聞」編集局論説「共和国と在日朝鮮公民にたいする敵視政策は中止されねばならない」

▶日朝友好日本国民使節団（団長赤松勇）共和国へ出発。

9日 ▶共和国創建23周年慶祝宴催す。

11日 ▶ソマリア民主共和国代表団訪朝。

▶訪朝日本総評代表団，清津着。

13日（～15日） ▶金日成首相出席の下，万寿台議事堂で全国商業部門活動家大会開かる。

16日 ▶板門店で南北朝鮮赤十字社間に予備会談出席の双方代表団の名簿交換行なわれる。

▶金日成首相，コロンビア国会代表団，日朝友好使節団と会見。

▶日本法務省，在日朝鮮人18人の再入国を許可。

17日 ▶金日成首相，15日に訪朝したハンガリー，ロシオンチ国民議会幹部会議長と会見。

19日 ▶在日朝鮮人第160次「帰国船」万景峰号清津港に到着。

20日 ▶板門店で南北朝鮮赤十字社間の予備会談開かれる。

▶東京——ピョンヤン間に北京経由で国際電話の臨時取扱い開始（～30日）。

21日 ▶東ドイツ代表団訪朝。

22日 ▶板門店共同警備区域内に南北を結ぶ直通電話線開設。

23日 ▶東京——ピョンヤン間にモスクワ経由で国際電話の臨時取扱い開始。

24日 ▶朝鮮，コロンビア国間の共同コミュニケ発表。

25日 ▶金日成首相，「朝日新聞」後藤編集局長と会見。

▶共和国外務省，第26回国連総会の朝鮮問題議題削除に関し米帝の陰謀策動を糾弾して声明発表。

27日 ▶金日成首相，中国労働者代表団と会見。

▶マレーシアは直接貿易を促進するための貿易協定を締結したいとの共和国の提案を拒否。

28日 ▶日本の学者代表団（団長，鈴木安蔵）訪朝。

29日 ▶板門店で南北朝鮮赤十字社代表の第2回予備会談開かれる。

▶第5次在日朝鮮人祖国訪問団，ピョンヤン着。

10月

3日 ▶在日朝鮮人の教育援助費と奨学金41回分2億8934万円送金。

4日 ▶朝鮮とモーリシアス間に領事関係設定される。

6日 ▶板門店で南北朝鮮赤十字社代表の第3回予備会談開かれる。——本会議をピョンヤンとソウルで交互に開催することに合意。

9日 ▶金日成首相、チョンリマ熙川工作機械工場をはじめ熙川地区工場・企業所を現地指導。

▶中国燃料化学工業代表団訪朝。

12日 ▶ルーマニア政府代表団訪朝。

13日 ▶南北朝鮮赤十字社代表第4回予備会談開かれる。

▶朝鮮政府通商代表団、ドイツとハンガリーへ出発。

14日 ▶金日成首相、第5次在日朝鮮人祖国訪問団と会見。

▶共和国とシエラレオネ共和国内に大使級外交関係樹立される。——共同コミュニケ発表。

15日 ▶朝鮮・中国ラジオ・テレビ相互協力協定調印。

19日 ▶ポーランド政府通商代表団訪朝。

20日 ▶板門店で南北朝鮮赤十字社第5回予備会談開く。

20日 ▶朝鮮・ドイツ1972年度商品相互供給に関する議定書調印。

24日 ▶共和国党・政府代表団、ベトナムへ出発。

25日 ▶朝鮮・ポーランド1972年度商品相互供給・支払いに関する議定書調印。

▶金日成首相、イラク政府経済代表団と会談。

26日 ▶ルーマニア政府通商代表団訪朝。

27日 ▶板門店で南北朝鮮赤十字社第6回予備会談開く。

▶ブルガリア政府通商代表団訪朝。

29日 ▶朝鮮・ベトナム経済援助・軍事援助提供協定調印、共同コミュニケ発表。

30日 ▶金日成首相、27日に訪朝した美濃部東京都知事と会見。

11月

1日 ▶朝鮮・ブルガリア72年度商品相互流通・支払いに関する議定書調印。

2日 ▶朝鮮・ルーマニア法律上の援助相互提供条約締結。

3日 ▶板門店で第7回南北赤十字社予備会談開く。

5日 ▶金日成首相、ネパール王国民族パンチャヤト代表団と会見。

9日 ▶チェコスロバキア政府代表団訪朝。

11日 ▶板門店で南北赤十字社第8回予備会談開く。

▶「労働新聞」去る10月31日に神戸市須磨海岸で元総連大阪府本部組織部長キム・ソントクが死体で発見された事件に関連して、「日本反動当局は総連幹部虐殺事件の責任を決してまぬがれることはできない」と論評。

12日 ▶金日成首相、アフガニスタン政府親善使節団らと会見。

13日 ▶金日成首相、9日に訪朝したルーマニア政府代表団と会見。

14日 ▶朝鮮中央通信によると、去る11日、北京在住朝鮮人が「海外朝鮮同胞会議」招集を支持して集会。

15日 (～23日) ▶労働党中央委第5期第3回総会開く。

16日 ▶ギニアとタンザニアを訪問する共和国政府代表団(団長、金敬連財政相)出発。

17日 ▶朝鮮・チェコスロバキア72年度商品流通および支払い協定調印。

▶朝鮮・中国船舶技術検査と船級制定事業分野での相互協力協定調印。

18日 ▶朝鮮・モンゴル72年度商品流通・支払い議定書調印。

▶朝・中国境河川運航協力委第11回会議合意書調印。

19日 ▶板門店で南北朝鮮赤十字社第9回予備会談開く。

24日 ▶板門店で南北朝鮮赤十字社第10回予備会談開く。

30日 ▶朝鮮職業総同盟第5回大会に参加する在日朝鮮人祝賀団、ピョンヤン着。

12月

3日 ▶板門店で南北赤十字社第11回予備会談開く——共和国、本会議の議案は南北に離散した家族、親せき、親友間の自由な往来を実現し、かれらの苦痛を巾広く減らすことによって、祖国の自主的平和統一の端緒をひらくうえに寄与しよう設定されるべきであると主張。

7日 ▶共和国外務省「朴正熙がいらい一味が情勢を激化させながら『国家非常事態』を宣布したことをきびしく糾弾する」と声明発表。

▶労働党代表団、ルクセンブルクに到着。

8日 ▶「民主朝鮮」論評「復活した日本軍国主義者の策動を断固粉碎しよう」

9日 ▶「労働新聞」社説「南朝鮮における『非常事態』の宣布はなにを意味するか」

10日 ▶板門店で南北赤十字社第12回予備会談開く——共和国は新議案を出し、韓国にその受け入れを要求。

11日 ▶金日成首相、ソ連最高会議代表団と会見。

▶政府代表団、カンボジア民族統一戦線、カンボジア

王国民族連合政府代表团と会談。

17日 ▶板門店で南北赤十字社第13回予備会談開く。

▶朝鮮・カンボジア間の共同コミュニケ発表。

19日 ▶第162次在日朝鮮人帰国船、清津着。

20日 ▶第42回在日朝鮮人教育援助費と奨学金3億0282万7800円送る。

▶朝鮮・マルタ間に大使級外交関係樹立、共同コミュニケ調印。

22日 ▶共和国外務省声明「キューバ共和国の12月16日声明を全幅的に支持、米帝国主義者がキューバに対す

る冒険的な侵略策動にひきつづきしがみつくなれば、一層甚大な打撃をまぬがれないであろう」

24日（～27日）▶全国教員大会開かれる。

26日 ▶朝鮮とリビア・アラブ共和国、貿易代表部相互交換に合意。

27日 ▶朝鮮・キューバ1972年度通商議定書調印。

28日 ▶黄海北道新溪・平原地区の灌漑工事完工を報道（大貯水池3、揚水場14、水路315キロ）。

▶朝鮮・中国71～72年度科学技術協力議定書調印。

参 考 資 料

1. ルーマニア社会主義共和国党・政府代表団の朝鮮民主主義人民共和国訪問と関連した共同コミュニケ
2. ノロドム・シアヌーク親王を歓迎する——平壤市民大会で行なった金日成首相の演説

1. ルーマニア社会主義共和国党・政府代表団の朝鮮民主主義人民共和国訪問と関連した共同コミュニケ (1971年6月15日)

朝鮮労働党中央委員会と朝鮮民主主義人民共和国政府の招きでルーマニア共産党書記長であり、ルーマニア社会主義共和国国家評議会議長であるニコラエ・チャウシェスク同志を団長とするルーマニア社会主義共和国党および政府代表団が、1971年6月9日から15日まで朝鮮民主主義人民共和国を公式に親善訪問した。ニコラエ・チャウシェスク同志は、夫人エレナ・チャウシェスク同志を同伴して来た。

ルーマニア社会主義共和国党および政府代表団は、朝鮮民主主義人民共和国に滞在中、ピョンヤン市と咸興市の工場、企業所、教育、文化機関を参観した。

またエレナ・チャウシェスク同志は、金聖愛同志とともにピョンヤン市内の幼稚園、託児所、絹織物工場などを訪れ、朝鮮の婦人と親善的な交歓の集いをもった。

朝鮮人民は、兄弟のルーマニア人民にたいするあたたかい友好の情からルーマニア代表団をいたるところであつち歓迎し、欲待した。

ルーマニア代表団は、朝鮮民主主義人民共和国に滞在中の全期間にうけた歓迎と欲待に謝意を表明した。

訪問期間、朝鮮労働党中央委員会総秘書であり朝鮮民主主義人民共和国内閣首相である金日成同志を団長とする朝鮮民主主義人民共和国党および政府代表団とルーマニア共産党書記長であり、ルーマニア社会主義共和国国家評議会議長であるニコラエ・チャウシェスク同志を団長とするルーマニア社会主義共和国党および政府代表団との間に会談が行なわれた。

(中略)

会談で双方は、朝鮮とルーマニアにおける社会主義建設について互いに通報し、両国人民間の友好協力関係をひきつづき発展させることについてと、一連の国際問題について意見を交した。

会談は、友好的で真摯で同志的なふん囲気の中で行なわれた。

双方は、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国

際主義の原則に基づいた朝鮮とルーマニア両国の党と政府と人民間の友好協力関係が帝国主義に反対し、社会主義偉業の勝利をめざす共同闘争を通して日まじに好ましく発展していることに大きな満足の意を表明した。

双方は、両国の党と国家間の兄弟的な友好協力関係の発展が朝鮮とルーマニア両国人民の利益と国際共産主義および労働運動の利益に全的に合致するものと認める。

両代表団は、朝鮮民主主義人民共和国とルーマニア社会主義共和国間の政治、経済、科学、技術、文化およびその他の関係を発展させ、朝鮮労働党とルーマニア共産党、朝鮮人民とルーマニア人民との兄弟的な友好を強化し、深める確固たる決意を再び明らかにした。

双方は、こんども代表団の交換および経験の交換をふやし、両党間の接触を深め両党の国際部および両国の外務省と経済省代表の会合を組織することについて合意をみた。

また双方は、両国の職業同盟、青年学生組織、女性同盟およびその他社会、大衆団体間の協力関係を深め発展させるよう鼓舞するであろう。

ルーマニア側は、兄弟的な朝鮮人民が金日成同志を首班とする朝鮮労働党の正しい指導のもとに自主、自立、自衛の路線を貫いて自国を短い期間に完全な政治的自主権と強固な自立的民族経済と強力な自衛力とさん然たる民族文化をもつ社会主義国に変えたことを熱烈に祝賀し、こんにち、この成果に基づいて朝鮮労働党第5回大会が示した6カ年計画の雄大な綱領を高くかかげて社会主義の完全な勝利と革命の全国的な勝利を促進するためにチョンリマ進軍の革命的高揚を堅持していることを高く評価した。

ルーマニア側は、アメリカ帝国主義の侵略と日本軍国主義の策動、そしてかれらの手先である朴正熙がいらい一味の軍事ファッショ独裁に反対し、社会の民主化をめざして展開している南朝鮮人民の正義の闘争を支持する。

ルーマニア代表団は、この機会をかりて南朝鮮からアメリカ侵略軍を撤退させ、いかなる外部勢力の干渉もうけることなく朝鮮人民自身の手で祖国の自主的平和統一

を実現しようという4000万朝鮮人民の闘争にたいするルーマニア人民の全幅的な支持と連帯を重ねて表明した。

この機会にルーマニアは、国連とその他の国際機構が自己の運命を自ら決定する朝鮮人民の合法的権利を尊重するよう強く主張し、朝鮮の統一にかんする朝鮮労働党の一貫した方針に基づいて朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議が宣明した8項目の救国方案を支持すると強調した。

朝鮮側は、ルーマニア共産党と政府と人民が社会主義建設と祖国統一のための朝鮮人民の闘争に積極的な支持を寄せていることに謝意を表明する。

朝鮮側は、兄弟のルーマニア人民がニコラエ・チャウシェスク同志を首班とするルーマニア共産党の正しい指導のもとに立遅れていたルーマニアを発達した工業と全面的な現代化の過程にある農業、そして都市と農村のすべての勤労者によりりっぱな生活条件を保障する先進的な社会制度をもった繁栄する社会主義国に築きあげたことを熱烈に祝贺し、ルーマニア共産党第10回大会が示した目標と1971~1975年間の5カ年計画の課題を遂行するため力強い労力闘争をくりひろげていることを高く評価した。

朝鮮側は、社会主義諸国と友好協力および同盟関係を発展させ、民族独立と自主権の尊重、平等権、内政不干涉および互恵の原則にもとづいてすべての国との協力関係を発展させ、帝国主義に反対する民族解放闘争を支持し、世界の平和をとげるためのルーマニア共産党の方針とルーマニア人民の闘争に全幅的な支持と連帯を表明する。

ルーマニア側は、朝鮮労働党と政府と人民が、帝国主義に反対し平和と社会主義建設のためのルーマニア人民のたたかいに積極的な支持を寄せていることに謝意を表明する。

双方は、現国際情勢が依然として社会主義と革命勢力に有利に、帝国主義と反動勢力には不利に発展していると指摘した。

双方は、世界のすべての反帝革命勢力が団結すべき必要性を強調した。

双方は、現下の社会主義諸国と共産党および労働者党がマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の完全な平等と自主性、相互尊重と内政不干涉および同志的協力の原則にもとづいて友好協力関係を強め、帝国主義者の侵略政策と植民地略奪政策に反対して決然とたたかい、自由と民族的独立の強化、社会的進歩をめざすすべての国の人民の反帝闘争を積極的に支援する必要があると認める。

双方は、ベトナム、ラオス、カンボジア人民がアメリ

カ帝国主義侵略者に反対する英雄的な救国抗戦において日ましに大きな勝利をとげていることを祝い、インドシナ人民の正義の闘争に積極的な支持と堅い連帯を表現した。

双方は、アメリカが侵略策動を中止し、ベトナムとインドシナ半島からアメリカ軍とその追従国軍を完全かつ無条件撤退させ、いかなる外部勢力の干渉もうけることなく、自身の問題を自ら解決すべきベトナム、ラオスおよびカンボジア人民の神聖な権利を尊重するよう強く主張する。

双方は、台湾からアメリカ軍を撤退させ、その軍事基地を撤去し、中華人民共和国の不可分の領土である台湾を解放するための中国人民の闘争を支持し、中華人民共和国の参加なくしては現国際問題の解決は考えられないと認める。

朝鮮側は、国連で中華人民共和国の合法的権利を回復するためのルーマニア社会主義共和国の積極的な立場を歓迎した。

双方は、米日反動層による日本軍国主義の復活に反対する日本人民、中国人民、そしてアジアのその他の国ぐにの人民の闘争を支持する。

双方は、中近東の情勢にかんする自分たちの立場を宣明して帝国主義に反対し、民族の独立と社会的進歩をめざすアラブ人民の闘争に連帯を表明すると声明した。

またパレスチナ問題は、パレスチナ人民の民族的利益に合うよう解決されるべきであると主張した。

双方は、帝国主義と新旧植民地主義に反対し、自由と民族的独立の強化をめざすアフリカ人民の闘争に支持と連帯を表明した。

またアメリカ帝国主義の支配に反対し、民族的独立と自主権をかちとるためのラテンアメリカ人民の闘争に連帯を表明する。

双方は、アメリカ帝国主義の侵略と破壊策動を粉碎し、社会主義を建設するためのキューバ人民の闘争を支持する。

双方は、搾取に反対し、民主的権利と社会主義をめざすヨーロッパ資本主義諸国勤労者の闘争を支持する。

世界の情勢と社会発展の現条件を考慮して双方は、領土の大小と人口、経済的かつ軍事的威力にかかわりなく、すべての国は人類の直面している主な問題の建設的な解決に参加すべきであるとみなしている。

双方は、軍備の撤廃、とりわけ核兵器の生産と使用を禁止させ、現在保有しているすべての核兵器を破壊するための人民の闘争をだんこ支持する。双方はまた、他国の領土からの軍事基地の撤去と、自国国境内へのすべての軍隊のひきあげ、軍事ブロックの一扫を主張する。

両代表団は、武力の使用と武力による威嚇を取除くことになるであろうヨーロッパでの安全を実現する重要性を支持した。

双方は、世界のすべての反帝革命勢力がかたく団結してだんて闘うならば、彼らはアメリカ帝国主義を頭目とする帝国主義者の侵略と戦争の策動を阻止、破綻させて、世界の平和を守ることができ、世界人民は民族的独立と社会的進歩をとげるようになるものとの確信を表明した。

朝鮮労働党とルーマニア共産党は、すべての共産党および労働者党との同志的協力で国際主義的連帯を発展させ、国際共産主義運動の現在の難関をのりこえて、両国人民の利益とすべての反帝勢力、世界の平和と社会主義偉業の利益に合うよう共産党および労働者党との統一団結を強めるために今後も戦うであろうことを声明した。

両党は、国際的中心が必要でないことを認める。

双方は、ニコラエ・チャウシェスク同志を団長とするルーマニア社会主義共和国党および政府代表団の朝鮮民主主義人民共和国訪問が、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の原則に基づいて両国の党と政府、人民間に結ばれた友好と協力関係を強化発展させるうえで大きな出来事となり、社会主義諸国と国際共産主義および労働運動の団結を強化するうえで大きく貢献したと強調した。

ルーマニア共産党中央委員会とルーマニア社会主義共和国政府は、朝鮮労働党中央委員会と朝鮮民主主義人民共和国政府に金日成同志がひきいる朝鮮民主主義人民共和国党および政府代表団がルーマニア社会主義共和国を公式に訪問するよう招請した。

また、金日成同志の夫人である金聖愛同志も招請した。

朝鮮側は、この招請をこころよく受け入れ、訪問期日はのちほど決めることにした。

朝鮮労働党中央委員会総秘書
朝鮮民主主義人民共和国内閣首相
金日成

ルーマニア共産党書記長
ルーマニア社会主義共和国国家評議会議長
ニコラエ・チャウシェスク

1971年6月15日 ビョンヤン

2. ノロドム・シアヌーク親王を歓迎する——平壤市民大会で行なわれた金日成首相の演説

(1971年8月6日)

尊敬するノロドム・シアヌーク親王とモニク・シアヌーク親王夫人ノ

尊敬するカンボジアの貴賓のみなさんノ

同志と友人のみなさんノ

きょう、平壤市の各階層人民は、わが国を公式訪問したカンボジア国家元首であり、カンボプチア民族統一戦線議長であるノロドム・シアヌーク親王をはじめとするカンボジアの貴賓のみなさんとお会いできる大きな喜びをいだいてこの場に集まりました。

私はまず、朝鮮労働党中央委員会と朝鮮民主主義人民共和国政府と全朝鮮人民の名で、カンボチア人民の卓越した首領であり、不屈の反帝闘士であり、われわれのもっとも親しい友人である国家元首ノロドムシアヌーク親王とモニク・シアヌーク親王夫人、そして親王の家族および親せきとその他のカンボジアのお客の皆さんをいま一度熱烈に歓迎します。

私はまた、あなたがたを通してアメリカ帝国主義侵略者とその手先一味に反対して英雄的にたたかっているカンボジア民族解放人民武装勢力とすべての愛国的カンボジア人民にもっともあつい戦闘的あいさつをおくる次第です。

このたび、国家元首親王がふたたびわが国を公式訪問したことは、朝鮮とカンボジア両国間の不敗の戦闘的な友好団結を示威するいま一つの画期的な出来事であります。

その間、わが人民は、いたるところで、長い間別れていた実の兄弟と再会するかのようなうれしい気持であなたがたを熱烈にむかえました。これは、国家元首親王にたいするわが人民のあつい尊敬と、闘うカンボジア人民にたいするかたい戦闘的連帯の明白な表われとなります。

こんにち、朝鮮とカンボジアは、共同の敵アメリカ帝国主義に反対する一つの戦線です。

ノロドム・シアヌーク親王が朝鮮人民におくるカンボジア人民の兄弟の友好の情と、あわせて反米救国抗戦でカンボジア人民がおさめている輝かしい勝利についての消息を伝えてくれたことは、わが人民にたいする新たな大きなはげましました。

国家元首親王がお話になりましたように、カンボジア民族解放人民武装勢力はアメリカ帝国主義者へのかいらい雇い兵に反対する武装闘争で自己犠牲心と英雄主義を発揮し、700万カンボジア人口のうち400万の住民を網羅する全国土の10分の7をすでに完全に解放しました。これはきわめて大きな政治的、軍事的な意義をもつ勝利であります。カンボジア民族解放人民武装勢力はすぐる乾期の9カ月間だけでもカンボジアの各地でアメリカ帝国主義侵略者とそのかいらい雇い兵にあいつぐせん滅的な打撃を加え、カンボジア解放地区を全国解放のたのも

しい基地にかえました。

われわれは兄弟的カンボジア人民のこのすべての成果を自己の勝利のように心から喜び、それにたいして熱烈な祝賀をおくります。カンボジア人民がおさめたこの勝利は、まさにノロドム・シアヌーク親王とカンプチア民族統一戦線の正しい指導によって達成されたものであります。

とりわけこの勝利は、国家元首親王がこれまで一貫して反帝的であり愛国的な正しい政策を実施することによってつみあげた大きな功績と、人民のあいだにひろまっている国家元首親王にたいするあつい信望ときりはなしては考えられません。愛国的なカンボジア人はアメリカ帝国主義とその手先どものためにきびしい戦争を体験しているこんにち、自らの生きた体験を通じて、過去、国家元首親王が堅持してきた対内外政策が全面的に正しかったことを胸ふかく感じており、国家元首親王をいっそうふかく尊敬し、そのまわりに日ましにかたく団結し勇敢に闘っています。

こんにちも国家元首親王の歴史的な1970年3月23日の5項目宣言をはじめ、アメリカ帝国主義とその手先どもに反対する正義の闘争へ一丸となつて立ちあがることを呼びかける国家元首親王の親しい精神的な声は、日ましにカンボジア全土にひびきわたり、たたかう人民に限りない力と勇気をふるいおこさせており、敵には大きな恐怖をいだかせています。

ノロドム・シアヌーク親王は、次のように述べています。

「…カンボジア人民は、カンプチア民族統一戦線の旗とカンボジア王国民族連合政府の指導のもとに祖国を完全に解放するときまで、いささかもひきさがることなく、いかなる妥協もなくアメリカ帝国主義に反対してひきつづきたたかうであります」

ノロドム・シアヌーク親王はカンボジア人民に送る24回目と25回目の手紙のなかで、カンボジア王国民族連合政府が、カンボジア民族の聖なる反米救国抗戦を完全な勝利へと導くための決意をいま一度厳粛に宣明しました。

ノロドム・シアヌーク親王は勇敢な反帝闘士として、自由と解放をめざす人民の偉業の熱烈な擁護者として世界の平和愛好人民のあいだであつい信頼と積極的な支持を受けています。

国家元首親王がなっている高い国際的信望によって、カンプチア民族統一戦線の指導のもとにある王国民族連合政府は、カンボジア人民の唯一の合法政府としてすでに世界の27の主権国家の公式な承認をうけており、その国際的地位は日ましに確固不動なものとなっております。

ます。

こんにち国際舞台で真に反帝の旗をかかげて民族解放闘争を支持する国において、ノロドム・シアヌーク親王の指導するカンボジア王国民族連合政府を承認し、アメリカ帝国主義の手先ロン・ノル——シリク・マタク反逆者一味をだんこ排撃するのはきわめて当然なこととなっております。

いま愛国的カンボジア人民の闘争の氣勢はきわめて高く、彼らには榮えある終局的な勝利の前途が明るく開かれています。

アメリカ帝国主義の手先ロン・ノル——シリク・マタク反逆者一味はプノンペンのせまい地域に包囲され、日ましにきびしくなる混乱と絶望のなかであえいでおり、彼らの余命はいくばくもありません。これはアメリカ帝国主義者の御用出版物までも認めざるを得なくなった厳然たる事実となっております。

われわれはカンボジア人民が遠からず必ず自分の祖国を完全に解放し、ノロドム・シアヌーク親王を国家首班とする独立した、平和な、反帝的で人民的な繁栄する新しいカンボジアを建設するであろうとの確信を重ねて表明します。

カンボジア人民がアメリカ帝国主義とその手先どもに反対する闘争でおさめている勝利は、全世界の被抑圧民族の反帝解放闘争に大きく寄与しており、わが人民の反米闘争にとって尊い支援となります。

世界のいかなるところでアメリカ帝国主義侵略を掃滅しても、それは世界のすべての人民にとってきわめていいことであります。

朝鮮民主主義人民共和国政府と朝鮮人民はアメリカ帝国主義のカンボジア侵略を自己にたいする侵略とみなし、カンボジア人民を支援するために全力をつくしてきました。われわれはこんどもノロドム・シアヌーク親王とカンプチア民族統一戦線の指導のもとにある王国民族連合政府が要求するときは、カンボジア人民を支援するのに必要なあらゆる措置をとる準備ができていことをいま一度厳かに宣明します。

こんにちカンボジア人民をはじめとするインドシナ人民は、祖国の完全な解放と独立のためにたたかっているばかりでなく、アジアと世界の平和を守るために血を流して闘っています。

アメリカ帝国主義者は、南ベトナム侵略戦争で敗北を重ねるようになるや、戦争の炎をベトナム民主共和国とカンボジア、ラオスへと拡大しましたが、それは侵略者自身の墓穴をほる結果をもたらしただけであります。

国家元首ノロドム・シアヌーク親王の発起によっておこなわれた、インドシナ人民の首脳会議の戦闘的旗じる

しのもとに堅く団結してすすむインドシナ人民の不屈の英雄的闘争によって、アメリカ帝国主義が悪名高い「ニクソン・ドクトリン」の看板のもとにおすすめている戦争の「ベトナム化」計画と「インドシナ人同士闘わせようとする」策動も全面的に破綻しつつあります。

ベトナム人民は、不屈の英雄主義を発揮してアメリカ帝国主義者の野蛮な武力侵略を勇敢にうち破り、アメリカ帝国主義の「不敗性」の神話をいま一度粉々にうちくだき、平和と民族独立と社会主義をめざす全世界の進歩的人民の偉業に大きく貢献しました。

ベトナム人民は、ホー・チ・ミン同志の神聖な遺言を高くかかげて、反米救国戦争で完全な勝利をかちとる日を早めるためにすべての戦線でいっそう力づくよく闘っています。

ラオス人民は、今年、南部ラオスでアメリカ帝国主義侵略者の大がかりな侵攻作戦を勇敢にうち破り、新たな輝かしい勝利をかちとったのをはじめ敵にひきつづき打撃を与えながら、解放戦争を成功裡におすすめています。

最近、アメリカ国内であばかれたアメリカ国防省のベトナム侵略戦争に関する秘密文書は、インドシナで侵略戦争を挑発した犯罪の張本人がほかならぬアメリカ帝国主義者自身であるという動かし難い事実を全世界の人々にいっそう余すところなく暴露しました。

アメリカ帝国主義者は、インドシナに居座るいかなる理由も根拠もありません。アメリカ帝国主義者は、インドシナで侵略戦争を直ちに中止すべきであり、自己の一切の陸海空の侵略軍と追随国およびかいらいどもの軍隊と、あらゆる殺りく兵器と戦争手段を一切とりまとめて無条件、かつ完全に撤退すべきであります。

われわれは、この機会をかりてアメリカ帝国主義とその手先どもに反対する兄弟的ベトナム人民とラオス人民の正義の救国闘争に全面的な連帯を表わし、先頃のベトナムに関するパリ会議で南ベトナム共和臨時革命政府代表団が提起したベトナム問題の平和的解決に関する項目の新たな発起とラオス愛国戦線がラオス問題の解決のためにこの4月27日と6月22日に提起した新しい提案を積極的に支持します。

われわれは、インドシナ3国人民がアジアと世界の全ての革命的人民の積極的な支持声援のもとに、アメリカ帝国主義侵略者の最後の一人をうちのめすときまで決然と闘うことによって、必ずや栄えある最後の勝利を勝ちとるであろうことをかたく信じます。

同志と友人のみなさん！

こんにち、アジアは革命の嵐がもっとも力づくよくふきすさぶ地帯に、反帝革命闘争の基本舞台になっており、

ここで帝国主義の生命線がたち切られています。

まさに、アジアに革命を行なう国、闘う国が多く、これらの国の団結が強いがゆえにアメリカ帝国主義者はアジアに侵略のはこ先を集中してアジアの社会主義国を封鎖し、攻撃して、アジアで急激に成長する民族解放運動を妨げようとする侵略策動をこらしてきました。しかし、アメリカ帝国主義者は団結したこの地域の人民のだんこたる反撃にあって敗北を重ねることによって、アジアにこれ以上居座っておれない袋小路に追いつめられており、こんにちついにアメリカ帝国主義のアジア侵略政策は全面的な崩壊の危機に直面するようになりました。

アメリカ帝国主義者が朝鮮侵略戦争でアメリカ史上最初のみじめな軍事的敗北をきっし、下り坂に向かった時から、インドシナ人民の勇敢な闘争によって再びじんだな敗北をこうむっているこんにちにいたるまでの全過程は、帝国主義者のいかなる狂気じみた策動もすでに傾いたかれらの運命を絶対に救うことはできず、人民の解放闘争を阻むこともできず、社会主義の勝利的な前進も阻むことができないということを示しています。

いま、アメリカ帝国主義は内外でいっそう重大な危機に直面しています。アメリカ国内で反戦運動と反政府運動が大衆的にもりあがっており、経済の沈滞と通貨ぼう張はつづき、失業者はふえ、国際収支はたえず悪化しています。アメリカで社会的不安は日ましに深刻になっており、支配層内の矛盾は極度に達しています。アメリカ帝国主義がその侵略兵力を世界の各地に分散、配置しておいた軍事戦略上の弱点は日とともにさらけだされており、市場と勢力圏を争奪するための帝国主義列強間の矛盾は日ましにするどくなっています。アメリカ帝国主義は、インドシナをはじめ世界のいたるところでひきつづき闘われ、うちのめされています。

アメリカ帝国主義者は、滅亡しつつある己れの境遇からぬけだすために必死にあがいて悪名高い「ニクソン・ドクトリン」をうちだし、いわゆる政策変更について騒ぎたてながら、よりこうかつで冒険的な侵略策動を強行しましたが、これもやはり失敗の運命をまぬかれずにあります。

アメリカ帝国主義者がアジアの革命勢力を攻撃するうえで大きな力を入れたのは、中華人民共和国を封鎖し、ちっ息させようとしたことであります。

中国で人民革命が勝利するや、アメリカ帝国主義ははじめから中華人民共和国を承認せず敵視し、あらゆる反動勢力を動員して中国を封鎖し、孤立させようとするあらゆる悪らつな策動をこらしました。アメリカ帝国主義者は朝鮮侵略戦争を挑発したのとときを同じくして中華人民

共和国の不可分の神聖な領土である台湾を占領し、中国人民にたいする軍事的侵略のおどしと敵対的挑発行為をたえず働いてきました。

しかし、これらすべてのことは水泡に帰しました。中華人民共和国は、アメリカ帝国主義の封鎖と孤立化政策にもかかわらずちっ息はおろか、アジアにきつ然とそびえる社会主義強国に、強大な反帝革命勢力に日ましに成長強化しています。

さいきんになって中華人民共和国を中国人民の唯一の合法的政府として承認し、中国と外交関係を結ぶことは阻むことのできない世界的潮流となっており、アメリカ帝国主義の中国封鎖政策は、恥ずべき結末にいたりました。

このように、アメリカ帝国主義が内外的に袋小路に追いつめられた歴史的な環境のもとで、先頃ニクソンはその中国訪問計画を発表しました。

これは、世界人口のほとんど四分の一を占める中国における偉大な革命的変革過程を「力」で阻止しようと20年以上も無謀に追求してきたアメリカ帝国主義の中国敵視政策がついに完全に破綻したことを意味し、アメリカ帝国主義が世界の強大な反帝革命勢力の圧力の前に屈したことを物語っています。

結局ニクソンは、かつて朝鮮戦争で敗北したアメリカ帝国主義者が板門店に白旗をかかげてあらわれたように、北京に白旗をかかげてたずねてくることになったのです。

すべての事実、われわれの時代に帝国主義の崩壊過程が非に早いテンポですすんでいることを示しています。

いま、ニクソンの中国訪問計画と関連して世界にはさまざまな世論がおこっています。

ニクソンの中国訪問は、勝利者の行進でなく、敗北者の行脚であり、アメリカ帝国主義の西山落日の運命をそのまま反映するものであります。これは、中国人民の大きな勝利であり、世界の革命的人民の勝利であります。

中国共産党と中国人民は、長い間、反帝革命闘争をくりひろげてきた栄えある伝統をもっており、敵のほこ先で立ち向かってそれをへし折り、敵のざまん戦術には革命的原則をもってそれを粉碎した豊富な闘争経験をもつ洗練され、鍛練された党であり、人民であります。こんにちも中華人民共和国は、アジア反帝革命勢力の頼もしい柱としてアメリカ帝国主義を頭とする帝国主義者の侵略と戦争政策に真っこうからたち向ってだんこ闘っており、プロレタリア国際主義の原則にしっかりとたつてアメリカ帝国主義侵略者に反対するアジアと世界のすべての革命的人民を積極的に支援しております。中華人民共

和国政府は、こんどもかわることなく自己の革命的原則をかたく守り、たたかう革命的人民をひきつづき積極的に支持声援するであろうことを宣明しています。

いま、ニクソンの中国訪問計画と関連して帝国主義陣営の内部は、新たな混乱と瓦解状態におちいています。アメリカ帝国主義に全面的に追従して中華人民共和国にたいする敵視政策を誰よりも先頭にたつて実施してきた日本の佐藤首相は、ろうばいと焦燥の余り、毎日のようにつじつまの合わないことをいいながら、自己の反動的政策の破綻をおおいかくそうと必死になっています。アメリカ帝国主義に盲従してきたその他の追従国とかいらいどももみなあわてふためいており、とりわけ蒋介石一味と南朝鮮がいらい一味は大きな不安と恐怖にとりつかれて悲鳴をあげています。

一般的な情勢は、日を追ってわれわれ革命を行なう人民にますます有利に変わりつつあります。

当面の情勢は、世界のすべての革命を行なう国、たたかう国の人民がかたく団結し、混乱に落ちいって下り坂を歩む帝国主義者どもに、より強大な攻撃をあたえて帝国主義にとどめを刺すことを要求しています。

歴史の逢験が示すように、帝国主義の侵略的本性はたとえその力が弱くなくても決してかわるものではなく、帝国主義者は自己の古い陣地からすすんで退こうとはしません。帝国主義者は窮地に落ちればおちいるほど片手にはオリーブの枝を、片手には銃剣をふりかざす「二面戦術」にいつそうしつこくしがみつながら平和の看板のもとに侵略と戦争策動をますます悪らつに強行するものであります。

アメリカ帝国主義の継続的な侵略策動のため、いままインドシナでは戦争の炎が燃えつづけています。アメリカ帝国主義者は、朝鮮で再び戦争をひき起こそうと各種の軍事挑発行為をたえまなく行なっており、アジアの一般的な情勢を相変わらず緊張させています。

アメリカ帝国主義によって日本軍国主義が復活した結果、アジアの情勢はいっそう先鋭化しつつあります。

1969年11月の米日「共同声明」から米日「安全保障条約」の自動延長と先頃の米日間の「沖繩返還協定」の締結にいたるすべての事実が示すように、アメリカ帝国主義者はいわゆる「ニクソン・ドクトリン」に従い、すでに公然と日本軍国主義者をアジア侵略の突撃隊におしたる段階に入りました。さいきんにもアメリカ帝国主義者は、アメリカ国防長官を直接日本と南朝鮮に派遣して日本の侵略武力をさらに大々的に増強し、アメリカ軍にかわってアジア侵略作戦を彼らにひきうけさせ、南朝鮮での「米日韓共同作戦体系」をいっそう完備するための謀議を企てました。

復活した日本軍国主義者は「アジア人同士たたかわせる」というアメリカ帝国主義の「新アジア政策」に便乗してかつての「太東亜共栄圏」の夢を実現しようと妄想しながら、国内体制のファッション化を急いでおり、海外侵略の野望を露骨にさらけだしています。日本反動支配層は、口を開けば日本が「アジアの主役」を果たすべきだと騒ぎたてており、南朝鮮、台湾、インドシナを含むアジアの広大な地域を自己の「防衛圏」として宣布し、朝鮮戦線に日本の侵略武力を投入するための謀略を公然とおしすすめています。

こんにちわれわれは、敵の断末魔的な「二面戦術」につねに警戒心を高め、彼らのいかなる悪だくみもそのつど粉碎することによって、死滅しつつある帝国主義を完全にほうむり去らなくてはなりません。

われわれは、アジアで戦争を防止し、緊張状態をなくし、真の平和を達成するためにはアメリカ帝国主義侵略者が南朝鮮と台湾から、インドシナと日本から、そして彼らが足をふみ入れているアジアのすべての地域から撤退すべきであり、追従国とかいらいどもを武装させて「アジア人同士たたかわせる」策動をやめるべきであり、米日反動どもが他国人民の民族解放闘争を弾圧し、その国の人民の内政に干渉するのをやめるべきであり、それぞれの国の問題は、その国の人民の手で解決されるべきであるとつよく主張します。

もし、アメリカ帝国主義と日本軍国主義者がしりぞかずに侵略策動をつづけるならば、彼らは人民の団結した闘争によってすべてのところから追い出されてしまうでしょう。

こんにち、アジアにたいするアメリカ帝国主義と日本軍国主義者にこの侵略と戦争の策動をぞ折させるためには、とくに彼らの侵略を直接うけているアジアの革命的な国々の人民による反帝反米統一戦線をいっそう強化することが重要であります。

アジアの革命的人民の戦闘的団結は、歴史的に形成されたものであり、帝国主義侵略者に反対する困難な闘争をつうじて強化発展してきました。こんにち、アメリカ帝国主義と日本軍国主義者の新しい侵略策動は朝鮮、カンボジア、中国、ベトナム、ラオスをはじめアジアの革命を行なう国々の人民の団結をいっそう強化させています。

朝鮮人民と中国人民は、アメリカ帝国主義とその手先どもに反対する共同戦線がいつも肩をならべ一致した歩調でたかかってきましたし、実生活をつうじて自分たちの運命が互いに切りはなせないことを体験しました。

アジアでアメリカ帝国主義と日本軍国主義者の共謀結託による侵略と戦争の策動が日まじしに露骨化しているこ

んにち、われわれ朝中両国人は、かつて同じごん塚のなかでたたかい、生死苦楽をともにしながら勝利したように、こんごも革命戦友として、兄弟的同盟者として敵のいかなる侵攻にも共同で対処すべき万端の態勢をいっそうかためています。

ごくさいきんにおいても朝中友好、協力および相互援助にかんする条約締結10周年を契機に、われわれ両国のあいだには党および政府代表団の交換が行なわれ、両国の首都平壤と北京をはじめとする各地で盛大な群衆集会が開かれました。これらの記念行事は、アメリカ帝国主義と日本軍国主義に反対して最後まで共に闘いぬこうとする朝中両国人民の確固なる決意をいま一度全世界に示威しました。

血で結ばれ、歴史のあらゆる試練にうちかった朝中両国人民の兄弟的な友好団結は不敗であります。わが人民は、こんごも永遠に共同の敵に反対する闘争で兄弟的な中国人民とともにすすむであります。

アメリカ帝国主義をかしらとする帝国主義者をうち負かすためには、アジアの革命を行なう国の人民だけでなく、世界のすべての革命を行なう国の人民の連帯をさらに強化しなければなりません。われわれは、今後マルクス・レーニン主義の旗じるし、反帝反米闘争の革命的旗じるしを高くかかげて、社会主義人民と団結し、アジア、アフリカ、ラテンアメリカをはじめ世界のすべての地域の革命的人民と団結して、われわれの共同の偉業の勝利のためにいっそう力づよく闘っていくであります。

わが人民は、アメリカ帝国主義と日本軍国主義の復活に反対する日本人民とアジア人民の闘争を積極的に支持します。朝鮮人民は、アメリカ帝国主義とその手先イスラエル侵略者に反対するパレスチナ人民をはじめとするすべてのアラブ人民の闘争に対して、帝国主義、植民地主義、人種主義に反対し、自由と解放と民族独立の強化をめざすアフリカ人民の闘争にたいして堅い連帯を表します。わが人民は、アメリカ帝国主義のたえまない侵略と破壊策動を粉碎しながら、社会主義を成功裡に建設しているキューバ人民の闘争と、ラテンアメリカ人民の反米反独裁闘争をだんこ支持し、世界のすべての国の人民の反帝反米闘争にかたい連帯を表します。

アメリカ帝国主義は、いまでこそ虚勢をはってはいりますが、世界の革命的人民がみなよってたかかってアメリカ帝国主義の五体を各地でばらばらにすれば、アメリカ帝国主義は結局は滅びさるであります。

日本軍国主義者も侵略の野望にとりつかれ、第2次世界大戦における苦い惨敗から教訓をくみとらず、再び昔の侵略の足跡をたどるならば、かれらもまた惨めな終局

的な滅亡の運命をまぬかれないでしょう。

同志と友人のみなさんノ

わが革命の終局的勝利をおさめるためには、国際革命力量との団結を強化するとともに、自己の主体的な革命力量をあらゆる面から強化発展させなければなりません。

アメリカ帝国主義が南朝鮮からしりぞかず依然として居坐り、朝鮮人同士闘わせようとあがき、アメリカ帝国主義の庇護のもとに日本軍国主義者が再侵略策動をつよめているこんにち、われわれはかたときも警戒心をゆるめてはならず、いかなる不意の事態にも祖国防衛において完べきを期するよう社会主義経済建設とともに、国防力の強化にひきつづき大きな力を入れなければなりません。

わが人民は、わが党の賢明な指導のもとに主体思想の旗じるしを高くかかげ、自主、自立、自衛の革命路線を具現して社会主義工業化の歴史的な課題をりっぱに遂行し、帝国主義者が武力でおそいかかってくるときには、いつでもそれを徹底的にうちめしうるしっかりした防衛力をきざきあげました。

南朝鮮人民は、共和国北半部の成果に励まされ、アメリカ帝国主義とその手先どもの軍事ファッショ独裁をくつがえし、日本軍国主義者の再侵略策動を粉碎し、自由と解放と祖国の統一を実現するためにひきつづき頑強にたたかっており、アメリカ帝国主義の植民地統治に手痛い打撃を与えています。

革命の側に日ましに有利に発展する情勢にあわてた南朝鮮の現かいらい一味は、アメリカ帝国主義の袖になおものがみつく一方、日本軍国主義者にいっそう頼って余命を維持しようと向こうみず狂いたっており、自己の売国、反民族の正体をおおいかくし、南朝鮮人民のなかに阻むことのできない気勢で高まっている平和統一機運をなだめるために謀略的ないわゆる「平和統一構想」についていっそう騒々しくわめきたえています。しかし、南朝鮮かいらい一味のこのおろかなぎまん的謀略策動は、何人をもだますことはできず、己れの滅びゆく運命を救うこともできないであります。

朝鮮の平和的統一のために一貫して努力している朝鮮民主主義人民共和国政府は、さる4月に8項目からなる祖国の自主的平和統一方案を再び提起しました。

アメリカ帝国主義と南朝鮮かいらい一味は、全民族の一致した志向を反映したわれわれのこの公明正大な平和統一方案にたいして今回もなんの応答もなく、ただ口先だけで「平和統一」をうんぬんしています。

もし、南朝鮮の為政者たちが真に國の「平和統一」を願うならば、まずアメリカ軍の長期駐屯を哀願するの

はなく、かれらを南朝鮮から追いだし、日本軍国主義者と結託してかれらを南朝鮮にひき入れるのを中止し、かれらが國の統一のための南北間協商をおこなえるようにし、朝鮮問題は朝鮮人自身の手によって解決すべきだということから出発しなければなりません。

南朝鮮の為政者たちがわれわれの8項目の平和統一方案を受入れるか否かは別問題としても、かれらが真に國の統一を願うならば、何故に南北が接触して協商するのを恐れることがありましよう。

われわれは、南朝鮮の民主共和党をふくむすべての政党大衆団体および個別の人士といつでも接触する用意があります。

南朝鮮の為政者たちが南北間の初歩的な接触さえも拒み、口先だけでいわゆる「平和統一」についてさわぎたてるならば、それは人民のより大きな憎悪と怒りをかうであります。彼らは、自分たちの「実力培養」が達成される1973年度以降、または、1970年代の後半期にはいって、はじめて統一問題が論議されうると公然とさわぎたてていますが、その内心は復活した日本軍国主義者をその時まで南朝鮮に全面的にひきいれ、いわゆる「勝共統一」の妄想を実現しようというものです。

わが人民は、共和国北半部で社会主義建設をいっそう促し、南朝鮮人民を支援し、南朝鮮革命を完遂して朝鮮人同志が祖国の統一問題を自由に、民主主義基礎のうえで、平和的に解決するためにひきつづき頑強に闘うであります。

南朝鮮からアメリカ帝国主義侵略者を撤退させて、朝鮮で緊張状態をなくし、わが國の自主的平和統一を実現するための朝鮮人民の正義の闘争は、全世界平和愛好人民の日ましにつよまる支持声援のもとに必ず勝利するであります。

ノロドム・シアヌーク親王とカンボジア王国は、久しい前からアメリカ帝国主義とその手先どもに反対する朝鮮人民の側にしっかりと立ち、ただ朝鮮民主主義人民共和国のみを朝鮮人民の唯一の合法的國家と認め、南朝鮮からアメリカ帝国主義侵略軍を撤退させ、祖国の自主的平和統一を実現するためのわが共和国政府と朝鮮人民の闘争を積極的に支持声援してきました。

私は、これに対しノロドム・シアヌーク親王と、カンブチア民族統一戦線と王国民族連合政府にあつい感謝をささげます。

朝鮮人民とカンボジア人民は、アメリカ帝国主義をかしらとする帝国主義に反対し、新しい生活を創造するための共同闘争を通して堅い戦闘的な友好のきずなを結びました。

わが人民は、カンボジア人民のように英知ある勇敢な

人民を自己の親しい友人にもっていることを非常に喜んでおり、両国人民の友好団結をつねに重んじています。この度のノロドム・シアヌーク親王の訪問は、われわれの反米共同戦線をつよめ、両国人民の戦闘的な友好団結をいっそう強化発展させるだけでなく、アジアの革命的諸国人民の反帝反米統一戦線をより強化発展させ、世界の革命的人民の偉業を促進させるうえにおいて、新たな大きな寄与となります。われわれは、これを非常に満足に思っています。

私は終りに、わが人民が反米共同闘争においてこんごともカンボジア人民と永遠に肩を組んでともに闘うであ

ろうし、かれらの頼もしい戦友に、同盟者になるであろうことをいま一度確言しつつ、尊敬するノロドム・シアヌーク親王の賢明な指導のもとに勇敢なカンボジア人民が反米救国闘争でより輝かしい勝利をかちとるよう心から希望します。

朝鮮人民とカンボジア人民間の不敗の戦闘的団結万歳！

ノロドム・シアヌーク親王を議長とするカンブチア民族統一戦線とカンボジア王国民族連合政府万歳！

アジアの革命的諸国人民の団結万歳！

世界人民の団結万歳！